

刻銘を有する中世陶器

吉 岡 康 暢

序 言

2. 刻銘陶器をめぐる問題

1. 珠洲系陶器の刻銘資料

結 言

論文要旨

中世陶器には、少数ながら漢字、仮名ないし文字風の短文を記した刻銘陶器がある。それは12世紀後半代を中心とする経筒類の一群と、14世紀代以降、主として寺院の什物とされた仏神器、茶器、甕壺類に分かれる。

まず、中世前期の特殊宗教用器は、造形的にも仏典・儀軌の深い知識を前提とし、絵仏師や在地寺庵の住僧が案文作成ないし直接筆者として関与したと考えてよく、日常用器の生産に従事した一般工人（百姓）を統率する特殊技能者グループの存在が想定される。

また、紀年を有しない簡略な刻銘を平仮名で記す例は、在地性の強い私的な作善修法のばあいに見られるが、平仮名が工人に広く普及していたことは、即興的なざれ歌や習書から推察できる。片仮名の刻銘は稀であるが、物品名や呪文を思わせるものに限られ、「口頭で語られた言葉を表現する文字」として使い分けられている。

つぎに、中世後期には、花瓶・瓶子・狛犬のような仏神器ばかりでなく、茶壺・水指・茶入等と大甕・壺に刻銘されるようになるが、銘文形式は整った寄進状・願文の体裁をとるものは少なく、納入先か寄進者のいずれかを省略したり、紀年銘のみが大半を占める。刻銘陶器の大半は、窯元が施主となり、寺社の「常住物」として、また先祖・現世の供養あるいは製陶技術の向上を祈念して、特別に製作、寄進したものであり、一部備前大甕のごとく「詔物」（特注品）を含む。この段階では、すでに漢字、仮名をとわず工人自身が刻記していると判断される事例が多く、相当数の工人名が確認できるのも、15世紀代以降、広域流通用雑器の規格的量産と茶器など特産高級品を同時に生産する体制へ移行したことの反映であろう。

このほか、刻銘陶器には地鎮祭などにかかわる呪字や私年号を記したものがあり、後者には商人が商売繁昌を祈願し製作させたとみられる例がある。また、文字をデザイン化した擬銘も現れる。このように、刻銘陶器は文字文化を媒体として中世の地域にねざす民衆文化の実態把握の一助となり、考古学と文献学の協業による歴史像構築への寄与が期待される。

序 言

中世陶器には、12世紀後半代を中心とする経筒・経外容器等の宗教用器に、紀年、造立主体、经文、趣意を刻記した一群があり、埋経修法の執行状況の復原から経塚造営の社会・文化史的背後事情を探る素材として研究がすすめられてきた。また、14世紀代以降、主として寺院の什物として特注・寄進された仏神器、安土桃山時代に盛行した茶会用の各種茶器類、および一般の日常用器＝甕壺類にも少数ながら刻銘を有するものがあり、紀年銘資料については編年の基準作例としてだけでなく、近年は農業暦とかかわらせ窯業生産の稼働季節を論ずる資料として活用が図られている⁽¹⁾。

しかし、陶器への刻銘の意味については、出発点としてどの生産工程で、だれが記銘したのかの確定が困難なままに、たとえば文明11年在銘の備前四耳壺について、発注者の「教舜が窯元へ出向き、作ったばかりの軟かい器に篋書きしたものであろう⁽²⁾」といった、直感的記述にとどまり、前記経筒・経外容器類についても勧進僧や遊行聖の関与がやや漠然と推定されているのが現状である。こうした刻銘陶器の性格をめぐる視点は、必然的に中世陶器の生産工人の存在形態に波及し、筆者の主たる問題関心もそこにあり、中世の識字層や生産技術の特質など地域の民衆文化の理解とも深くかかわってくる。

小稿は、筆者が資料の集成をすすめている北東日本海域に分業圏を展開した珠洲系陶器の刻銘資料をまず紹介する。ついで、そこで提示された留意点を手がかりに、他の中世諸窯の関連資料を援用して若干の所見を述べる。なお、紀年銘については、17世紀代の丹波大甕に実在しない「元久四年」の刻銘がみられるなど、別途に社会史的考察を要する部分を多く胚んでいるので、総合的検討は後日を期したい。

1. 珠洲系陶器の刻銘資料

珠洲系陶器で確認された刻銘資料は、完好品13点と陶片が若干ある。このうち年銘経容器は

- (1) 経外容器 ⁽³⁾ 別稿で掲出したので、基礎データの提示にとどめる。

仁安貳年七月十四日申時了	願主僧定裕(花押)	告奉正□
	栗田重包	

天神山経塚(新潟県西頸城郡青海町青海)出土

仁安2(1167)年 新潟県立美術館保管

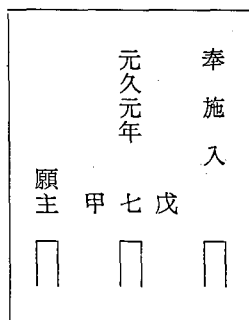
器高 25.1cm

口径 19.0cm

胴径 23.3cm

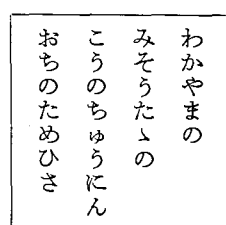
底径 18.0cm

(2) 経筒



法住寺墳墓（石川県珠洲市法住寺）出土
元久元（1204）年 珠洲焼資料館保管
現高 9.5cm
口径 13.0cm
胴径 18.2cm （下胴亡失）

(3) 経外容器（第1・3図1，図版I）



出土地未詳
12世紀後半 愛知県陶磁資料館保管
総高41.0cm，（蓋）器高10.6cm，口径23.0cm，底径7.0cm，
（身）器高33.8cm，口径18.0cm，胴径25.3cm，底径20.8cm
〔刻書積文〕東四柳史明

蓋は、頂部を山笠形に突出させて鈕とし、器体は口縁部を平直にこしらえた倒碗形をなし、器面は入念な横撫で仕上げとする。静止糸切り痕をとどめる蓋上面に一株の草花を線描し、周縁に刻みを施す。身は、端部円頭状の印籠造りで、下膨れの筒身に太櫛によって振幅がゆったりと変化する波状文が四帯間隔をおいてめぐる。蓋は沈んだ黒灰色、身は焼成堅牢な暗灰色を呈し、口縁部に黄灰色の降釉が付着することから、別々に焼成されたことが判る。蓋が紐轆轤成形なのに対し、身は紐輪積成形後轆轤仕上げとし底外面粗面で、蓋身の形状からしてもとりあわせのセットの可能性がある。蓋は猿投窯産牡丹三筋文経容器（愛知県陶磁資料館保管）に類似し、頂部の葉端を尖らす草花文の描法も渥美窯をはじめ平安後期の東海の瓷器系陶器に通用のもので、印籠造り口縁とともに、瓷器系陶器の影響を示す。

刻書は、篋状器具を用い「若山御庄 直郷の住人 越智爲久」の4行25字を手なれた筆致で記し、左下に「爲久（略押）」と書き添える。「直郷」（珠洲市宝立町^{ほうりゅう}）は窯跡が集中し、継起的に稼動した珠洲窯の中核支群の所在地である。また、「おちのためひさ」は、伊豫国の名族として周知され、平安中期に追捕使「爲保」（『権記』）等がみえる「越智」氏⁽⁵⁾としてよければ、若山庄の庄務権を握る日野家から派遣され、庄園経営にあずかる過程で土着化した武士とも解されよう。

(4) 経外容器（第1・3図2，図版I）

上向田経塚（富山県西砺波郡福岡町向田）出土 12世紀後半 西井龍儀保管
総高30.8cm，（蓋）器高6.1cm，口径22.3cm，底径10.1cm，（身）器高26.0cm，口径17.3cm，胴径20.0cm，底径15.2cm 〔刻書積文〕田中稔

焼成不良で灰白色を呈する円筒形の身に、身を受ける段がめぐる蓋を被る。黄色を呈する焼成不良品である。身の中央に大きく2行にわたり、「きよわらの たけすえ」とやや稚拙ながらのびのびした書体で記す。蓋は紐轆轤成形、糸切り底、身は紐輪積成形後轆轤調整を行っており、砂底である。

本経塚は、小矢部川西岸に突出した標高70mばかりの丘陵先端で、径10m前後の塚が2基確認されている。うち1基の礫積施設に埋納されていたが、容器中に遺物はなく経筒とも考えられる。付近から刀子4口と銅鏡(?)が1面出土している。

(5) 五輪塔⁽⁷⁾ (第1・3図3, 図版IV)

出土地未詳 13世紀前半 愛知県陶磁資料館保管

総高22.7cm, 底径9.1×10.1cm [刻書釈文] 樋爪喜美

空風・火・水・地輪の四部材よりなり、下端に杓を作り出した拳玉形の空風輪と、軒が薄くゆるやかに反り上がる火輪は小さめに作られている。水輪は、空風輪を受ける上部が突出し、

らん	かへらざる	りける人	所くいてい	人のいり	いかなる	志でのやま	(正面)
ぶなりとも	くにし	らかりね	くさまく	わすれ志と	らわれも	わするな	(右側面)
せん	かたみにぞ	んのちの	かさなから	ばかき五	人三らいを	やかていく	(左側面)

底に地輪に嵌合する円板を付す。扁球形を呈する内部は空洞である。正面に鮮鋭雄渾な葉研彫りにて種字「𑖀」(金剛界大日如来)、背面に笈書き草書体で「加徳」と刻書する。また、上下を箱形に削り上げ底とした地輪の三面には、以下のひら仮名の弔歌3首を刻む。

水輪は紐轆轤、他の部材は手捻りあるいは粘土材を鋭利に切削して成形するが、いずれも焼成堅牢で鼠色を呈する器肌を入念に磨いて仕上げており、荘重な形姿とあいまって絶妙な陶技の冴えをみることができる。接合部は漆で継いだ跡をとどめ、火輪の

空洞は納骨用の空間とみられる。

本資料について江崎武は、胎蔵界大日如来の三昧耶形である仏舍利納蔵の五輪形舍利塔型式を採用し、金剛界大日塔として造立されたと考定する。中世能登における大日如来信仰の盛行は、板碑研究によっても周知されており、分骨習俗の在地領主層への浸透を示す点でも恰好の資料といえる。

(6) 壺R種C類 (第1・4図4, 図版II)

出土地未詳 13世紀前半 森田興保管

器高20.0cm, 口径10.6cm, 胴径17.8cm, 底径8.8cm

倒卵形にこんもり膨らむ体部に、端部を嘴状に挽き出しやや外傾する頸部中ほどに横撫でによる微隆起を生じた口縁がつく。照りのある灰黒色の器肌をなし、口縁から上胴に黄灰色の降

釉が鱗状に付着する焼成堅緻な製品である。下胴に紐積み部位で窯割れを生じた箇所がみられる。上胴に3行にわたり篋書きで6字ほどの漢字様の刻銘があり、「長保 今□ □□」等の判読が試みられているが、文字風のデザインで飾った擬銘文と考えられる。

(7) 小 甕 (第2・4図6, 図版Ⅲ)

出土地未詳 15世紀前半 石川県立歴史博物館保管

器高24.7cm, 口径24.6cm, 胴径24.4cm, 底径10.0cm

口縁を鐙状に折り返し、ずん胴で底部鉢形との接合部が段をなす。類品に乏しい特殊器種で、大破したものを復原・修覆してある。口縁内外に黄褐釉の降釉を被り、全体に黒灰色を呈する焼成良好な品である。体部の三面に約70度と110度の間隔をとり針書で「松波（花押状刻文）」「御寺」と「△」の図文を記す。

珠洲郡内浦町松波付近は珠洲窯の南辺に位置する支群が所在し、中世木郎郷の有力土豪松波氏の本貫地である。「御寺」は、応安元（1368）年若山庄の領家日野家の建立と伝え、のちに松波氏の菩提寺となった京都天竜寺系の禅院万福寺⁽⁸⁾をさすと考えてよい。したがって銘文による限り、松波氏の一族を万福寺墓地に埋葬することを想定して特注した蔵骨器であるかにみえる。しかし、本資料が若山庄に西接し日野家が管掌する上町野庄上流域に所在する通称経塚山中世墳墓（輪島市町野町寺山）の出土品であることが確認されてみると、足利様の花押状刻文が日野家のそれを意識したとすると14世紀中葉前後にみえる時光の袖判（図版Ⅲ）に近いことや、三ツ鱗の家紋とのとりあわせ等からして、有力者の実名や家紋を刻記し、尊貴性をデザインしたと考えるべきであろう。

(8) 壺R種C類 (第1・4図5, 図版Ⅳ)

出土地未詳 15世紀後半 長谷川幹晃保管

器高26.5cm, 口径16.5cm, 胴径25.8cm, 底径17.0cm

撫で肩で底部の大きい器体に、丸縁の内端にかかるく面をとり、なだらかに立ち上がる口縁をとりつけた球胴小壺。口縁の約4分の1を欠失する。器肉は厚く、体内面に紐積み痕を残し、中胴から底外面を斜位、縦位に撫でつけた粗作である。暗灰色ないし黄灰色を呈し焼成不良で、胎土に大粒の礫粒を噛み、所々に石はぜを生じている。亀裂が走る底面中央は粘土で補強し、底内面を搔き上げている。上胴に草本茎背状器具で「西方寺」、やや間隔をおいて篋による一筆描きの僧形ともみえる刻画風の図文と、左上に矢印状を添えた曲線記号状の描刻を入れる。

「西方寺」は、現在珠洲市宝立町柏原の遺址に小字名をとどめるにすぎないが、近世珠洲郡の真宗大谷派触頭妙厳寺（宝立町鶴飼）の前身とされる。もとは直郷に所在した真言ないし天台系の古刹で、惣庄鎮守と目される法住寺白山社の真南に位置し、法住寺から出た「南の坊」と推定されて⁽⁹⁾おり、中世後期若山庄の有力寺院と考えられる。15世紀代以降、珠洲陶器の生産地はほぼ西方寺地区に集約され終焉を迎えるが、胎土・作工から本資料が西方寺支群で焼成さ

れたことが確実視される。銘文と呪図?を記した意図は明瞭でないものの、燃料・陶土を採取する陶山の用益を介して工人集団と結びつきをもち、窯場の管掌者として栃平氏等の在地土豪が推定され、器種からしても西方寺の特注品とするより、6と同様工人が活動の場とした地域の中核寺院名の尊貴性を意識して記銘したのであろう。

(9) 壺K種C類(第2・4図8, 図版II)

石川県鳳至群柳田村黒川 中谷家伝世 15世紀前半 能登天領黒川村庄家中谷家保管
器高45.7cm, 口径20.5cm, 胴径44.3cm, 底径13.5cm

丸縁の小さな口縁を強く折り返し、怒り肩ずん胴から小ぶりの底部へ収縮する。光沢をおびる暗褐色の器胴はよく磨かれ、上胴に銀鼠色の降灰釉を被る。体部に小判様の叩打痕と、叩き目を削去した際の擦痕が一面に浮き出し、叩き目痕が所々に残る。口縁裾まで焼成時の被せ物の証跡をとどめる。刻銘は、口頸部の付け根に達筆の楷書体にて「橋爪坊」と記す。



本壺を現蔵する中谷家は、歴代庄屋をつとめた奥能登の素封家で、伝来の経歴、橋爪坊の所在は詳らかでないが、某寺塔頭の「常住物」として特注されたことが判る。

(10) 水注B類(第2・4図7)

出土地未詳 15世紀前半 珠洲焼資料館保管
器高13.0cm, 復口4.5cm, 復径16.7cm, 底径7.7cm

口頸部が収縮した撫で肩の器体に、大きなハンドル状把手と注口(いずれも後補)がつく水注。上胴横位、下胴縦位の粗い磨き仕上げとし、削りぎみの調整は底外面におよぶ。灰色を呈し焼成並製、胎土に小礫粒が混和する。当該期の瀬戸水注の忠実な模作品である。頸基部の注口を挟む位置に約90度振り、筧書きの整った楷書体で「西」「南」と刻記する。

「西」「南」は、配字から口頸部を中心に、四方に「東西南北」を配する意図が明確で、井鎮めや地鎮めの呪祭と関係する陰陽道用語かと思われる。つまり、口頸部を天帝(天罡大神主=北斗星)にみたて、四天に西方土公水神王、南方土公水神主等の神々を招寄し、聖域を画する宗教観を現したものとみられよう。⁽¹⁰⁾

能登における中世の呪祭は石川県西川島遺跡群(鳳至郡穴水町)に豊富な実例がある。ここでは水神の精霊が宿る容器(目)として、注口部を打ち欠き箸状木器を挿入した珠洲水瓶が井戸底に沈められていた(桜町および大町縄手1号井戸、12世紀後半、13世紀前半)。また、村落の一角に3.6mほどの土壇(13世紀後半~14世紀前半)を設け、内部の木製祭器類は北向きに人形・刀形・舟形と獅子頭、南向きに人形・矢形・舟形と火鑊白・陽物、東端に鳥形を配し、「集落の四方を守るとともに、種々の災厄をつけて埋め流し(祓)、ひいては豊作を予祝」する呪祭行為と考定されている。この他、⁽¹¹⁾「 死」^(迷故三 本来無)「 城 悟故十方空」の呪符木簡も出土している。本水注は、15世紀代に時折みられるように蔵骨器として使用されたと推定されるので、刻字本来の機能を果たしたか疑問であるが、方角にかかわる俗信の流布を示す物証と

してよいであろう。

(11) 壺R種E類(第2・4図9, 図版Ⅲ)

出土地未詳 15世紀前半 個人保管

器高19.6cm, 復口12.9cm, 胴径23.7cm, 底径11.5cm

大きく歪み、過半を亡失した口頸部が強く外反し肩が突出する。上胴に降釉がかかり、漆黒色を呈する堅牢な製品である。草本茎背状器具を用い3字の草書体、花押状刻文と背面に三ツ鱗文の一画を略した図文を刻む。3字は「悉水切」あるいは「少水部」ともみえるが意味をなさず、花押と組み合わせた装飾的な擬銘帯とみるのが穏当であろう。

(12) 壺K種C類(第4図10, 図版Ⅳ・Ⅴ)

秋田県男鹿市脇本浦田出土 15世紀前半 磯村朝次郎保管

器高19.0cm, 口径9.5cm, 胴径16.7cm, 底径7.5cm

球胴の体部に、口縁の一部が損壊したゆるやかに外反する円頭状口縁がつく。全体に灰色を呈し焼成並製、胎土に多量の白色細礫粒を混和する。上胴に篋書きで4行にわたり片仮名の小字で刻書がある。難解であるが強いて判読すれば「ハ(八)七(十メ)ツ& ㄥニカミヨ(ヘヲ) ノノカム ㄨー となるが、意味をなさない。

(13)~(15) その他(第4図11~13)

完好品に短字句を記し、あるいは陶片に断片的な刻字をとどめるものが若干ある。⁽¹²⁾13は叩文中壺の完好品(富山県高岡市伏木出土, 13世紀前半, 器高38.5cm)で、頸部に「大」の刻文と上胴に「大王丸」(「大」はいずれも裏文字)と読める刻銘を入れ、人名としてよければ蔵骨器として使用されている点をも考慮して、使用者(幼年)かと考えられる。叩文中壺片14(石川県鳳至郡穴水町御館遺跡出土)は「□大一申□」かと思われるが未詳。15は水瓶の頸部片で、「拝見津□、さか見涯ヵ」と一応読め地名の可能性を残すが確定的でない。

2 刻銘陶器をめぐる問題

(1) 仮名銘と擬銘

以上、珠洲系陶器の刻銘資料を紹介してきたところによれば、12世紀後半~13世紀前半代と15世紀前半代を中心とするグループに大別され、それぞれの器種・刻銘の内容に差異が存することが明らかになった。すなわち、中世前期のグループは、擬銘と考定した壺R種C類1件以外は、定形的な経筒ないし経外容器が4件と五輪塔、水瓶片が各1件あり当該期固有の宗教用器に集中している。これに対し中世後期のそれは帰属銘(常住物)を記す1件以外は、もっぱら蔵骨器で寺院名を記したものの2件、擬銘とみられるものが1件あり、花押ないし紋章文刻文、

あるいは呪図?と組み合わせ使用されている。ほかに、方角に関する俗信にかかわって「西南」と記銘したと推定した稀少例と、意味不明瞭な片仮名文を記した壺が各1件ある。

紀年、造立主体、経文・趣意、ときに製作者を刻記する経容器類は宗教用器の生産によって特徴づけられる渥美窯を主体に普遍的に知られており、金属製経筒の刻銘と変わらない。珠洲系の陶製外容器の在銘資料は4件にすぎないが、無銘のものは散発的ながら加賀～羽後に定数存し、在銘資料各種瓶類・仏神像・五輪塔等の宗教用器におよんだ点で渥美窯に準ずる性格を看取することができるが、平仮名で記す事例は全国でも例がない。1・4(図番号、()は本文番号。以下同じ)はたんに平仮名で記銘したというだけでなく、紀年、勸進・願主・檀越名の区別、趣意を省略する点で共通する。そのばあい、「おちのためひさ」「きよはらたけすえ」が檀越か後述する「作者」「造手」か即断できないが、1が「若山御庄直郷住人」と本貫地を明記し、かつ当該期に帰属する珠洲市上戸カメワリ坂窯が直郷北辺の丘陵に所在することに着目するならば、陶工長ないし工人を統括する下級庄官級の在地小領主が自ら檀越として経塚を造営したとも解されよう。下胴の2字を「爲久」と読んでよければ、略押の図形は上級領主層のそれと異形のあるいは一過的なものと思われる、そうした階層性にふさわしい。したがって、平仮名による簡易な刻銘は、漢字による定型的な形式をとり、下書にもとづき刻書した特注品とみられる(1)・(2)と異なり、造立主体の居住地に至近の霊地へ埋経するという在地性の強い私的作善修法でとられた刻銘方法と考えてよいであろう。

ところで、珠洲窯以外で、まとまった平仮名書きの刻銘陶器としては、渥美窯惣作10号窯(渥美郡田原町、器高5.5cm、12世紀後半)⁽¹⁴⁾採取の片口小鉢(第5図17)、京都府由良川河口(与謝郡加悦町)出土の越前中甕⁽¹⁵⁾(第5・6図14、器高34.2cm、嘉元4・1306年)と越前窯採取の大甕⁽¹⁶⁾(第6図20、図版V、13世紀前半)がある。17は、男女の肉欲を赤裸々に詠み込んだざれ歌で、世俗で流布していたものか自身の作か定かでないものの、草花文や書体とあわせ工人の手になる即興的なものと判断される。渥美窯の製品には「万・大・上・の」等の刻字文刻文をはじめ、時折断片的な字句が見出されるが(第6図21・22)、たとえば、大甕の一部、短頸壺・広口瓶の大半に「万」を記すことで知られる加治坪沢2号窯の一部の埴底内面に「三」「白二」「十」「井」とともに「三ひめの里」と記すなど、12世紀後半代の陶工が平仮名混じりの作文(作歌?)に通じていたことが窺える。

そのことは、20越前大甕片からもいえるのであって、中胴の左部分に「人□□ □□□□や
ら □□□□□□ □□□□□□ □□□□人 しに」と10行以上にわたり流暢な筆致による平仮名主体の長文が刻記されているが、右行から左上部分は筧で擦り消されていて判読不能である。このように銘文をいったん消去したのち、11cmほどの間隔をとった右側に3行にわたり「きき たも—— ふねう」と刻書している。本資料は体部の約4分の3を欠き、亡失部分にも刻書があったかもしれないが、遺存部分については意味不明なもの、いったん消去して

いることからみて工人自身による習（戯）書と考えられる。

つぎに、「かけん四年 八月十七日 江ちせんの くになうの きたのこ於り 於たの志やう あかた⁽¹⁴⁾とらかたい うのか免（嘉元四年八月一七日 越前国丹生北郡織田庄 県の虎ヶ太夫の甕）」と、紀年・国郡庄名・氏名・物品名を連記した14は、従来一般に県の虎ヶ太夫所用の甕として特注されたと解釈したため、織田庄から何らかの事由で丹後へ二次的に運ばれたと考えられてきた。しかし、織田町焼山地区に13世紀後半～14世紀代の窯跡が確認され、かつ13世紀代以降、若狭・丹後・但馬の日本海域が越前陶器の商圏となったことが判明してみると、通有の中甕が遠隔地から窯元へ特注される状況は想定しにくい。本資料の出土状態は詳らかでないが、由良川河口の港湾町の一角に営まれた中世墳墓の蔵骨器かと推定され、生産地から遠隔の消費地へ直接移出されたとするのが自然である。国郡庄名を冠し自己流の大ぶりの花押を据えた「太夫」＝長者の名乗りは、農村の有力者というより、窯場あるいは製品の流通の管掌者を看取させ、当中甕を製作した工人が、その勢威を書きとどめたとみるのが穏当ではなからうか。このばあいも工人が仮名に習熟していたことが前提となり、16もその端的な物証となろう。前記17・20は偶然の遺存であるだけに、12世紀後半代には、おそらく男性主体の工人層に宮都の顕貴層で“女字”と呼ばれた平仮名が普及していたと考えねばならない。

平仮名の刻名陶器では、この他16世紀前半代の越前片口中壺（出土地未詳、器高26.2cm、福井県陶芸館保管、第5・6図15）に「うし 三ら太ら（花押）」（うし三郎太郎）と記すものがあり、資料の増加が見込まれる。

これに対し片仮名主体の刻銘陶器は12の1例にすぎない。当資料は、「口頭で語られた言葉を表現する文字⁽¹⁸⁾」として成立・普及した片仮名が、大体掟書・日記・小地名・物品名等の用例⁽¹⁹⁾に限定して使用されるようになった中世後期の事例だけに注目されるが、個々には片仮名としてはっきり読解できる字句を含む一方で、1行目と3行目の末尾など字と認めがたい象形を含んでおり文脈は通らない。ただ、片仮名は祝詞・告文・起請文等の願文・祭文に多用され、⁽²⁰⁾“言霊”として書きとめられたとする瀬田勝哉の指摘を念頭におき、刻銘中の「カミ」を「神」と解してよければ、意図的に読解不能な呪句を即興的に記し、工人自身あるいは所持者が神の祝意にあずかることを念じたといえなくもない。このように考えると、12は片仮名様擬銘文の一種ともいえよう。

ここで、解説で漢字様擬銘文かとした資料をとりあげよう。4・9は、明らかに漢字を象形しながら字形は誤字・誤写でなく、意図的な変造字と判断される。そのことは、9の異体3字に足利様の花押状刻文を添え、一画を落とした三ツ鱗文のとりあわせからもいえよう。花押状刻文は珠洲陶器固有の加飾法であって、13世紀後半～15世紀前半代にかけて実用の花押とまごう写実的なものが少数ながらみられる。⁽²¹⁾とりわけ9に記された定型的な武家風花押は、貞和5（1349）年、永和4（1378）年の文書（『加能古文書』371・599号、図版Ⅲ）に袖判を加えて

いる若山庄領家日野時光・資教、あるいは在地支配者として登場する被官本庄友宗のそれに類似することから、日野家の窯業生産への関与ないし日野家への貢納品といった現実の庄領主との関係を投影しているかにみえる。とくに、貞和5年の名主職宛行状にみえる時光袖判と刻文の図形・筆順は酷似している(図版Ⅲ)。しかし、両資料が製作された15世紀前半ごろの若山庄はすでに畠山氏守護代遊佐氏によって本家・領家知行分の代官請が行われる状況であり、2点に滅亡後1世紀余を経た北条氏の三ツ鱗文が併用されていることも、同一の工人集団によって製作されたことを推知させこそすれ特注品と解するのは困難で、文字・刻文の虚構性を暗示するように思われる。仮名と当時盛用された足利様花押を組み合わせ尊貴性をデザインしたとみるのが妥当であろう。

このようにみえてくると、中世陶器、とくに瓷器系の大半とその影響下に成立した珠洲陶器にみられる刻字文刻文・刻印も、そうした意識の延長線上の所産と考えられるのである。たとえば越前陶器では、「本・上・大」、「は・ト」、「一・三・四・六・七・十」の漢字・仮名・数字が単字、ときに縦、横に連記ないし異記号が組み合わせられ⁽²³⁾(第6図24)、信楽陶器でも「大・木・田・丁」、「ハ・キ・ニ」等のほかに「イロハニホヘト」と記すなど⁽²⁴⁾基本的に通ずる刻字文風記号が見出される。これら刻文については、かつて古代の筧記号の図形・図文を基調としながら、中世では施文器種・部位が異なり作業記号から装飾記号へ転化していること、刻字文については各種の攘災招福の俗信の存在にかかわる信仰標識的性格の付与を意図した工人の発意によるものが存することを指摘した。ただし、生産組織の集約化をうけて大窯の共同利用が実現する15世紀代以降の刻文は、工人ないし工人グループを識別する窯印としての機能を具備するようになるとみられるが、充分論証するに至っていない。⁽²⁵⁾

(2) 経塚供養具

前項で検討を加えた仮名書きの刻銘を、私見のごとく使用者から与えられた下書きの転写、あるいは工人自身のときに即興的な発意にかかるもののいずれにせよ、仮名に習熟した工人の手で刻書されたとすると、漢字の刻名はどう考えるべきであろうか。

従来、刻記者については、識字層がたまたま窯場に居合わせたとか、使用者ないし僧侶を呼び寄せて刻書を依頼したと説明されてきた。しかし、刻名を観察すると、①通有の筧状ないし串状器具による筧書き、釘彫りのほか、②柔軟な草本茎背状器具⁽²⁾・1・4・9他)、③櫛歯状器具、④金属器を使用したかと思われる針書きがあり、①～③は器具の動きから陶器の成形・調整後それほど時間をおかず刻記したとみてよい。

刻記者と工程を考える際、刻記の場所、すなわち窯屋の所在も状況判断の材料となる。中世の窯跡の発掘例は多いが窯屋に関する情報は乏しく、13世紀代の瀬戸市小田妻窯の前庭部⁽²⁶⁾におけるロクロピットを伴う溝で囲画した工房施設の検出は数少ない事例の一つであるが、中世後

期の備中・⁽²⁷⁾亀山窯（倉敷市玉島）では窯場と一体的な小貝塚、散発的な墳墓を伴う生活跡が存在する。ここでは、工房跡と確定できる遺構は存しないようであるが、窯跡から30mばかり離れて造成した平場から、10～15m²前後（1×2間）の小形掘立柱建物や内部に複数の大甕を埋置した総柱の倉庫（2×3間、33m²）が発見され、製作作業場も付近に営まれたと推定される。このように、一般の村落から隔離して工人集団の居村に窯場、窯屋が付属していたばあい、一般的に刻記者は工人集団中に求めるのが自然であろう。

中世前期におけるかかる状況を探る事例として、承和4（1174）年、伊勢神宮祠官度会常行の歿後14年にその追善供養を祈願し、渥美半島伊良胡郷に所在した万覚寺に留錫する京の勧進聖や在地僧を願主ならびに筆者・助筆とし、度会・荒木田氏を筆頭に神宮祠官と親族を檀越・結縁に加えて執行された、伊勢・小町塚経塚（伊勢市浦口町過旦山）と周辺の同亀谷経塚（伊勢市前山町）等について多面的な考察がなされてきた。最近、関連する新出資料⁽²⁸⁾（第7図、図版Ⅷ）が発見されたので、まず紹介しよう。

本資料は蓋を亡失するが、口縁部を印籠造りとした桶形の精質、重厚な瓦製経外容器（器高26.5cm、口径25.2cm、胴径26.8cm、底径26.0cm）で、下記の銘文を有する。

造之 B-2 「治承二年七月十二日」	得道也 過去大 中臣蓮 妙爲成 佛	中雅實 沙彌參 西	作者 僧隆圓	造手 藤井成 重	願主 僧寛喜	入如右 敬白 承安四年 五月廿一 日	出離生死 頓證菩提 施	右志者爲 教豪尊靈	奉施入如 法経筒一 口	敬白
	A-1	A-2		B-3	A-3		B-1			

一読して明らかなごとく、A部分は小町塚経塚出土承安4年5月21日付光背銘（『経塚遺文』283号）、B部分は亀谷経塚出土治承2（1178）年7月12日付経外容器の銘文（『経塚遺文』322号）であり、両者を合成・作文している。しかも、紀年は小町塚経塚にかけながら、造立メンバーは願主を亀谷経塚と同じ僧寛喜とし、前経塚の「造手」と後経塚の「作者」および結縁衆とみられる2人を併記するが、「中雅実」の刻記位置が小町塚経塚と同じなのは注意を要する。製作年次を記銘通り承安4年とし渥美窯と同時的に発注したとするには、願主を現存資料では4年後に初見する寛喜とし、発願の趣意も亀谷出土経筒にならい「爲教豪尊靈」とするなど不審が残る。承和4年の小町塚の埋経と無縁に後年執行された修法の供養具だった可能性を否定できない。かつて、渥美窯産の頭長・遠清刻銘壺の出土状況を検討し、宗教専用器に国守（在京貴族）の勢威を示威する刻書を施し有力在地領主層向けに移出したことがあったとする私見⁽²⁹⁾に類似した状況が、ここでも想定できるのではなかろうか。

ところで、当瓦製外容器と同大同工のものに、伊勢山田方面の出土と伝える、承安2年8月18日付の瓦製経外容器（蓋欠、身高28.8cm）があり、「僧禅仁現世安穩後生善處」のため「如法経箱」を施入した旨を記す（『経塚遺文』276号）⁽³⁰⁾。写真判定では「承安」をはじめ書き癖は酷似し、「鍛冶御園住人僧観秀造之」の刻銘通りとすれば、新出資料とも渥美産となる。しかし、現在の考古学的知見では渥美半島で瓦器の出土例は報ぜられておらず、新出資料が陶製光背・経筒の銘文を写していることが明らかになってみると、承安2年銘瓦製外容器にも原型となる陶製品が存したとみられる。2例とも瓦器分布圏の東辺に位置する伊勢で、同一工人の手で製作された可能性が強い。新出資料の治承2年後それほど年数を経ずに、承安2年銘瓦製外容器も紀年銘時の埋経とは無縁に外宮周辺で執行された埋経修法で使用されたのであろうか。願主・檀越と被供養者の異なる銘文を寄せ集め、一種の擬銘文を新調の供養具に刻書する行為は不可解であり、幾通りもの願文の入手方法も問題であるが、瓦製外容器が渥美製品の模作の域を出ず、刻銘を写した陶製品自身がモデルでなかったことは、亀谷経塚のそれが口縁印籠造りでなく素縁であることから明らかである。神宮周辺で祠官層が執行した埋経修法の記録や銘文が勧進聖に書きとめられ、神宮に保管されていたと推定できよう。

ここで疑点の残る新出資料をとりあげたのは、願主のつぎに「造手」と「作者」をあげることである。「造手」は、奥村秀雄が「陶工関係の工人」とするのに対し、中村五郎は「造らせた者」あるいは「経塚を造営した者」⁽³²⁾と解し、筆者は窯場を管掌する在地小領主の可能性を考えてみた。⁽³³⁾新出資料が仮に小町塚経塚と一連のものであれば、藤井成重を工人と考えることはできなくなる。近年、赤羽一郎が紹介した湖西窯産の経筒ないし経巻を収納したとみられる五輪塔⁽³⁴⁾（総高38.9cm）（第3図19）は、妙法蓮華経1～3の1節と大日如来法身真言の種字を配し、「（前略）久安二年七月廿八日申時造了 清原重安造之（下略）」（水輪底外面）と記し、造手が分명한製品と解されている。しかし、藤原重安は結縁集の末尾に列する藤原重房の同族かと思われ、藤井成重も小町塚経塚出土の別の陶製光背に「白瓷瓦奉造立」として藤原菊元・山吉成・日前守□とともに名を連らねており（『経塚遺文』289号）、直接製作者とするのは無理であろう。

ここであらためて小町塚経塚出土の陶製光背をみると、うち1点に「作者僧隆円」がみえる（『経塚遺文』283号）。完好の2面（光背A・B、東京国立博物館保管）は、種字の数・配置のほかに瑞雲文地と唐草文地、頭光中央の内圈周縁の加飾が印花文と蓮珠文刻印の違いがあるが、2面とも細やかな篋書きのタッチは同工で裏面の刻銘の筆致とも一致する。また、光背の形態が異なり裏面の銘文に藤井成重がみえる欠損品⁽³⁵⁾（『経塚遺文』289号、光背C）は、地文を瑞雲文とし内圈周縁の加飾に印花文と蓮珠文を併用するなど構成要素は同じであるが、印花文の原体は完好品と異なり太彫りの施文手法は裏面の刻銘に通ずる（図版VI）。

光背Aの「作者僧隆円」はCでは「仏師隆円」とみえ、藤井成重も結縁衆として名を連らね

ている。絵仏師隆円の役割は、A・BとCの光背が別工人の作であり、かつA・B・Cの曼陀羅図の共通性から設計図の作製者とするのが妥当であろう。前記結縁衆であるとともに、「造手藤井成重」および「清原重安造之」「造立土塔一奩清原重安作」とも記す人物は、生産地において合力した在地領主層としてよければ、製品の直接の依頼主、あるいは窯場の統轄者として末尾に名をとどめたとも解されよう。造形・刻書を直接担当したのは、「瓦工 三河国平四郎」（『経塚遺文』284号）のごとき工人集団を統率する陶工長であり、集団で専門的技能を有する一部の識字層であったと考えられる。

小町塚経塚の刻経作業や供養具の製作は、さきに指摘した通り御厨政所をさす⁽³⁶⁾とみられる「御所」で行われ、万覚寺や窯場もほど遠からぬ場所に位置していたかと思われる。当経塚の造営は、京都一伊勢神宮一伊良胡御厨を結ぶ特権階層の作善事業であり、⁽³⁷⁾刻経は9名以上の僧と結縁衆の一部が担当し、事業を推進した万覚寺の客僧グループには京に足場をおき、密教儀軌に精通した絵仏師も参加する組織的な作業チームが編成されていた。埋経事業に勧進聖とともに移動した仏師のほかには在地の有力寺社・国衙に奉仕する技術者の参画があったことは、天養元（1144）年、播磨・須賀院瓦経塚造営にあたり、「（上略）瓦造小工佐伯秋里 二度 瓦造大工佐伯末行 二度 仏師継別宮僧長鑒 一度」（『経塚遺文』199号）等とみえることから傍証しうる。

上記小町塚、須賀院両瓦経塚のばあいはやや別格としても、さきの鍛冶御園住僧観秀のごとく、経筒や五輪塔等の特殊宗教用器が聖によって製作されたことは、特殊技能者であるとともに聖自身のもつ離俗性から充分考えられることである。その間の事情を珠洲窯について類推すると、成立当初より中核支群として継起した宝立支群の所在する直郷には、領家日野家の祈禱所であり庄惣鎮守と目される法住寺白山社が、また半島北辺の三崎支群＝三崎郷には須々ヶ嶽（山伏山，172m）を背にし、日本海域の守護神として崇敬された高勝寺須々社が鎮座し、珠洲窯の南辺に位置する松波支群＝木郎郷にも日野氏所縁の有力寺院万福寺が建立されるなど、⁽³⁸⁾窯場と地方寺院には緊密な関係が認められる。これら地方寺院は、陶山の用益を介して工人集団と経済関係を保持するだけでなく、おそらく客僧・住僧が技術指導者として恒常的に窯業生産に関与していたことは、特殊宗教用器のみならず器種・器形・技法にみる瀬戸内の須恵器系窯と東海の瓷器系窯の製品の選択的複合と創造、たとえば仏器として定数生産された瓶類のうち、水瓶が布薩形の金属器を選択し、白磁四耳壺仿製壺をいちはやく製作していることに端的に示されている。⁽³⁹⁾中世前期の技術革新と伝播に遊行聖が果たした役割についてはすでに多くの研究者が言及し、三浦圭一によって集約されているが、⁽⁴⁰⁾なお国衙や地方の有力寺社に奉仕する技術者との連係をあわせ追求する必要がある。

(3) 茶器と大甕

備前陶器はもっとも多くの刻銘資料が知られているが、付表にあげた中世の37例の内訳は、⁽⁴¹⁾
 暦応5(1340)年を上限とし、14世紀代2, 15世紀代4, 16世紀代31である。これを器種別に
 みると、三・四耳壺7, 壺4, 水指8, 花入4, 花瓶4, 大甕9, 他1となり、大半は寺院の
 「常住物」として製作を依頼ないし寄進された仏器＝花瓶, 茶器＝茶壺・水指・花入, 貯蔵器
 ＝壺等の特注品であり、特産の商品として流通した大甕, 茶器類の在銘品には「詠物」も含ま
 れている。大甕は、最古の年紀を有する和歌山県長寿禅寺裏山(西牟婁郡日置町大古)出土品
 にすでに「備前国住人香登御庄□□」「あつらう也」とみえ、遠隔地からの注文生産に応じて
 いたことが知られ、「備前焼製作の作業場に、これだけの絵と文字を自由に記すことの出来る
 人物が出入していた」⁽⁴²⁾と解されている。

その後の備前窯の刻銘陶器の年代別推移は、貞治2(1363)年～文明12(1480)年在銘の三・
 四耳壺5点は、生産地を擁する香登庄と周域に所在する寺院の「常住物」、すなわち『教言卿
 記』応永13(1406)年4月8日条に「一、備前茶壺二、一ヲ百ツム買」と初見する葉茶壺とし
 て納入されており、数寄茶の風が真言・天台の地方寺庵におよぶ有様を垣間みることができる。
 かかる寺院常住の仏器・茶器は、16～17世紀代を通して寄進されたものが伝世され現存してお
 り、締め腰長胴の器体にラッパ状に外反する口頸部をとりつけた大形花瓶は、備前の中世末～
 近世前期を特徴づける内陣必備の荘厳具であった。

これら地元で需給関係をもった特注品とは別に、16世紀代には西日本一帯に広域流通した2,
 3石、ときに4石入りの大甕と、京・大坂をはじめとする都市の大名・禅僧・町衆向けの茶器
 に刻銘資料がみられるようになる。大甕とともに大量に出回った片口鉢に刻銘資料が皆無に近
 いことからすると、大甕は民需品とはいえ片口鉢よりはるかに生産コストの高い耐久消費財で
 あり、元亀2(1571)年を上限とする刻銘品は各地からの詠えに応じて製作される高級特産品
 であったことを物語っている。天文18(1549)年の『天王寺屋会記』に「水こぼし、びぜん
 物」と初見し、以降桃山時代の茶の湯の盛行につれて珍重された備前の茶陶類への記銘も、永
 正4(1507)年在銘道仙作水指が備前独自のいわゆる縄簾管耳タイプとして表現され、在銘茶
 器がきわめて個性的な作行を示している点で、大形堅牢を誇るとはいえ、規格化された大甕と
 異なる付加価値の高い特注の商品として評価されたことと関係することは贅言を要しまい。

このように、中世後期の刻銘陶器は特産の高級特注品、とくに寄進物としての基本的性格を
 そなえているが、それとともに工人名を刻記した資料が目立つのが注意される。作者と明記す
 るのは、四耳壺1, 広口甕1, 水指3, 大甕1の6例にすぎないが、ほかに伊部村の有力者で
 あり窯元であった「木村」姓が6例みえ、作者ないし施主を兼ねて製作・寄進している。施主
 を兼ねたばあい直接生産した工人と即断できないものの、宗教用器はもっぱら僧侶や陶工長が
 製作し、基本三種は一般工人＝百姓が生産していたかと思われる中世前期と異なり、集団に埋
 没していた工人たちが陶技を競いあいつつ一部が陶工としての自意識を高揚させる状況を窺わ

せる。

中世諸窯の作者刻銘がほとんど16世紀代に下るなかで、備前窯では早くも文(福)安元(1444)年銘大壺に「作者伊部村之釣井衛門太郎」(図版Ⅶ)が登場するのは、15世紀代に北方の医王山・不老山、南方の竜王山の村落に近い径2km圏内の数箇所⁽⁴³⁾に全長40mに達する半地上式大窖窯を築いて窯場の固定化を図り、広域市場圏確保のための基本三種の飛躍的増産と特産的商品の品質向上を同時に達成した、北・西・南三大窯体制に直結する生産組織の集約化、工人集団の主体性確立の反映とみてよいであろう。

16世紀代の茶陶に名をとどめる「道仙」「谷口喜道」他、花瓶の製作・寄進者として頻出する木村一族が苗字を名乗るのは寺院什物のゆえに形式を整えたものともいえるが、漢字にも習熟しすでに集団内で陶工としての地位を確立した特殊技能者グループが実在したと考えてよいであろう。大甕は「紀年+捻土・詔(+作者)」の独自の形式をとり、ときに記号を添えた雄渾な仮名混用体で、ブランド商品のトレードマーク的性格が濃厚である(第8図26・27)。

以上、備前の刻銘陶器についてみてきたが、これらのことは、たとえば信楽窯で年紀の明らかな7点が、応永3(1396)年を上限とし、15世紀代1、16世紀代5で、器種も宇治茶専用の茶壺として広域的に流通した耳付壺・大壺をはじめ香炉・水指があり、備前陶器同様、特産的器種に記銘・年銘陶器が集中する傾向が認められる。また、寺社向けの瓶子・狛犬に若干の刻銘資料が存するにすぎない瀬戸・美濃窯で、16世紀代の紀年をもつ名物の鉄釉四耳壺(祖母懷茶壺)が5点知られているのも刻銘陶器の性格をよく物語っており、茶器類をほとんど生産しなかった越前窯で甕が2点確認されているのも象徴的のようにみえる。

(4) 私年号

前項までにふれなかった刻銘陶器をめぐる問題で、なお検討を要するものに私年号の問題がある。管見に入った私年号とみられる資料をつぎに紹介する。

A 備前四耳大壺(図版Ⅶ)

石井原山之 橋本坊之 常住物也 歳次 福安元年三月廿三日 甲子 作者伊部村之 釣井衛門太郎(花押)	岡山県千光寺伝世・保管
	福安元(144)年
	器高 63.0cm
	口径 17.5cm
	胴径 46.1cm
	底径 22.8cm

備前最古の年銘陶器として周知され、長卵形の胴部に垂直に立ち端部を扁平な玉縁仕上げとした口頸部をとりつける。茶褐色ないし黒褐色に堅く焼き締まり、一面に黄緑の自然降釉がふ

りかかる。上胴に小ぶりながらしっかりした行書で上記の銘文を刻む。石井原山千光寺（赤磐郡瀬戸町）は、備前窯の北西約10kmに所在する備前屈指の天台の古刹である。

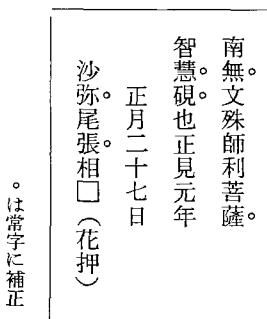
B 丹波三耳壺（図版Ⅶ）

出土地未詳 16世紀後半 国立歴史民俗博物館保管

器高41.2cm，口径14.2cm，胴径34.1cm，底径12.5cm

撫で肩球胴の器体で，かるく折り返した丸縁口縁から真っすぐ立つ頸基部に低い凸帯がめぐり，上胴に小さな横耳を貼付する。赤橙色の地に一部黄橙色の焼き斑を生じ，一面に淡い黄緑色の降釉を被る。器肌は石英粒のはぜが散見するが目立たず，全体に細やかな素地に，丁寧な横撫で調整を施し円滑に仕上げる。三耳の間隙に太い篋状器具によって6～8×3cmほどの短冊形を画し，「寛有天王元年丑四月吉祥日」，90度振って「壺屋四西（右）衛門▲」の刻銘を入れる。口縁および一耳の一部後補。

C 陶 硯（図版Ⅷ）



愛知県知多郡武豊町富貴 中田池A1号窯

正元2（1260）年

縦 14.3～14.8cm

横 9.2～9.4cm

高 2.0cm

昭和62（1987）年，焼成室より出土。陸から海へ向けて幅がやや逡減し，海の断面はV字形，四囲に周縁がめぐる石硯形陶硯。裏面に尖った串状器具で刻書する。

Aは，在地の名刹の特注品にふさわしい堂々たる大壺で，「福安」は使用者である千光寺住僧個人の一過的発意か，地域の寺院や周辺で使用されていたのか詳らかでない。くずれた足利様花押を据えた村落領主級の作者釣井衛門太郎も能筆の識字層であり，私年号の創案者の可能性もある。

Bは，標準的な形姿とはいえないが，丹波窯で知られる天正2年，慶長2年，慶長18年銘壺等と比較すると口端がつぶれた玉縁をなさず，口頸部も内傾しない作工は天正2年銘壺に近似する。一方，16世紀後半代の丑年は永禄8（乙丑，1565）年，同17（己丑，1589）年があるが，遺物の特徴から一応天正5年か17年が該当しよう。「寛有」（寛有，寛大）の麗句を形容詞とみ，「天王」は除疫神として中世に流布した祇園信仰＝午頭天王から連想したと考えられる。「壺屋四（西）右衛門」は，あるいは祇園社の神文である窠文（胡瓜形）にヒントをえたかと思われる印章を有する陶器商と考えてよいので，商売繁昌を祈念して刻銘を依頼し祇園社等へ寄進したのであろうか。私年号が商人によって着想されたとすれば，類例に乏しい興味深い資料となろう。

Cは、「正元」とすると改元は3月26日であるから2年のこととなる。当刻銘は誤字が目立つので、一見単純な当字ともみえるが、2年を元年とするうえ、磯部幸男が指摘するように西大寺（真言律宗）僧の東国伝道の過程で急速に普及した文珠信仰にかけて、「正元」を仏語の「正見」⁽⁴⁴⁾（八正道の一）におきかえたと解すると、仏語を用いたという点で16世紀前半代に東国で広域的に使用された「弥勒」「命禄」に通ずる発想ともみられよう。書体は達筆とはいいいくいが、全般に筆順に乱れはないことから刻記者はかなり漢文に習熟していたとみななければならず、花押の図形を勘案すると^{いづし}栢頭志庄域に足場をおく在地小寺庵の住僧ないし土豪「沙弥相□」の案文を、依頼された工人が忠実に刻記したものかと思われる。なお、正嘉元（1257）年より連年異常気象がつづき、正元元年には諸国に飢饉疫病が蔓延して多数の死者を出し、当陶硯が製作されたとみられる2年まで災害がおよんでいることが、世直し⁽⁴⁵⁾、改元願望の伏線にあったかもしれない。

これら3件の私年号を記した刻銘陶器は、産地を異にし年代が隔離する点的資料であるが、いずれも元年で、「文安」→「福安」、「天正」→「天王」、「正元」→「正見」の一字をおきかえたとしてよければ、A・Bは寿（嘉）字のもつ招福除災効果の増幅を意図したとみられる点で、私年号の最大公約数的要件を満たしているといえよう。使用時期はAが13世紀中葉で早い部類に属するが、Bの15世紀中葉、Cの16世紀後半は私年号がもっとも盛行した時期で、Aが地方寺庵に関係し、住僧の発意によると推察されることも私年号の一般的趨勢とよく合致する⁽⁴⁶⁾。

3件の私年号は、Cが社会不安と結びつく可能性をもつが、千々和到のいう実例に乏しく地域的・時間的・継続性の稀薄な「使われない私年号」⁽⁴⁷⁾に属しよう。また、ここで示された私年号のルールはすでに研究の過程で指摘されているが、従来の事例が宗教関係の文書・記録・金石文などが大半を占めていたのに対し、特注品とはいえ陶器のような民需品にも独自に私年号が使用され、Bのごとき商人やCが土豪とすれば私年号の加担者層が広がったこととなり、今後の新出資料が期待されるだけに、私年号の性格を深める新たな手がかりを提供したといえる。その意味では、板碑に現れた私年号からも推察されることであるが、造立主体となった小地域の結縁衆のごとき小地縁集団が地域の寺庵を媒体として私年号を創案・使用していたとすれば、多様な招福除災の俗信を基盤に、文字の普及や地下の連歌、喫茶の盛行をはじめとする地域の民衆文化の創造と発揚を考える上での素材となろう。

結 言

以上、刻銘を有する中世陶器について、若干の留意点と所見を述べてきた。ここでは、中世前期の宗教用器を除く紀年銘陶器65点（付表参照）を中心に総括的な整理を行い、刻銘陶器の性格に接近してみたい。

まず、刻銘の形式、書体・書風、器種を分類するとつぎのようになる。

(1) 形 式

おおづかみに、紀年銘を有するものと有しないものに大別できる。後者は、第1・2項で紹介した「常住物」ないし所有者名を記すものもあるが、平仮名の刻銘、寺社名を入れその尊貴性を顕示した一種の擬銘、漢字・仮名風の擬銘、および工人の即興的な戯書・習書などのばあいである。これに対し前者は、①使用者（納入先）住所・氏名、②器名・使途、③趣意、④紀年、⑤寄進者ないし作者住所・氏名、⑥その他（容量）の項目より構成され4類に大別できる。ただし、刻銘陶器は器物自体が寄進物あるいは詔物であるため②を刻記する物件は稀で、③の明確なものも少ない。

- A ①③④⑤を網羅し体裁を整えたもの
- B 形式Aから①あるいは⑤のいずれかを欠くもの
- C ④⑥、ときに④⑤⑥を組み合わせたもの
- D ④のみを基本とし、③を併記する（8、付表番号、以下同じ）など例外的なもの若干を含む

(2) 書体・書風

- A 漢字—— a 楷書 b 行書
- B 仮名—— I 平仮名 II 片仮名
- C 漢字・仮名混用
- D 擬字—— I 漢字 II 仮名

紀年銘陶器はAに限られる。Cは刻銘の句文で混用された戯書・習書風のものや稀に住所、屋号+人名（32・59）と、大甕のように項目別に使い分けた両様がある。

(3) 器 種

- A 宗教器—— a 経筒・経外容器 b 五輪塔 c 水瓶・瓶子・花瓶・狛犬
- B 貯蔵器—— 大甕・壺
- C 茶 器—— 茶壺・水指・花入・香炉
- D その他—— 陶硯

まず形式Aには、「敬白 奉寄進 ②花瓶 ①千年山弘法寺江 ⑤香々登庄伊部村内 木村 三郎衛門尉宗吉 ③現当二世之所願悉皆満足 ④天文廿年辛亥六月二十八日」(16)のごとく、通常みえない②をはじめ各項目を網羅した事例がある。本資料は、胴全面に七行にわたりしっかりした楷書で大きく刻書しており、①は山号+寺名、⑤も苗字・通称（仮名）・諱を名乗るなど内容・体裁を整えており、「寄進物」の性格をよく現している。ただし、寄進状と願文に用いる頭書き「敬白」と「奉寄進」を連記し、①どこへ、②何を、③何のために、④いつ、⑤誰が、の順に記す寄進状通有の配列はかなり乱れている。これは他の寄進物の刻銘についても

いえることで、納入先が遠方の弘法寺（邑久郡牛窓町）であることから、寄進者・作者が作成した在地的な案文とみてよい。なお、16～17世紀の備前花瓶に代表される形式Aが、一般に「奉寄進……敬白」とするのは、寺社への器物の寄進とあわせ陶芸の上達、振興を祈念する趣意が込められているからであろう。

形式Aでは、わずかに10が寺院の「常住物」として作者へ直接発注した「詠物」＝特注品の可能性を残すのみで、ほとんど寄進物なのに対し、形式Bの大部分は区別が明瞭でない。また、形式Cはもっぱら備前大甕にみられ、寄進物も当然あったに違いないが「詠(あつらへ)」(1・21・29)と刻記する個体の印象が強い。管見では消費地から容量を記したものは時折出土するが、「詠」ないし紀年を記した例はなく、それらは大体寺社の伝世品とみられる。したがって、出土品の9例をひとまず除外すると49% (32例) を占める形式Bと、大体紀年銘のみの形式Dの29% (19例) の帰属が刻銘陶器の基本的性格を考える際の鍵点となる。

ところで、形式A→B→Dは、項目が順次省略されながら基本的に寄進の形式を保持していると判断される。そのことは、紀年銘のみのものも、正面観を意識するかのように入念な楷書体で大きく刻記するのが通例であることから予測できる。日付は、「貞治2年正月吉日」(2)のように製作月日とするには疑問が残る物件もないではないが、月別集計に大きなかたよりはなく器物の成形完了日としてよい。日付を略し「吉日」ないし「月日」としたものが32例、年で書き止めとしたものが8例で3分の2に近いのは、重大な権益のからむ土地等の寄進と異なるからであろうか。

さらに角度を変え、刻銘あるいは省略形としての紀年銘が使用者側と寄進・作者側いずれの要請で記されたかを類推してみると、「長法寺谷之坊教舜之也」(6)のように住僧個人に帰属すると考えられるものはほとんどなく、大甕のような詠物にも紀年を入れるとはいえ、使用者側の注文だった形跡は窺えないように思う。付表に作者と記すものが10例あり、不明分にも9・16・17のごとく備前の有力窯元木村一族が作者＝寄進者とみられるものや(第8図28)、22のように25によって作者であることが確認できる例を含み、57・58に「賀藤□景」「助九良」を記すことからすると、他の紀年銘のみの瀬戸祖母懷茶壺3例も、作者からの寄進物との類推がみちびかれよう。「吉助」(28)、「保二郎」(32)、「新二郎」(43)等の人名も作者とみられるから、刻銘の多くは作者・寄進者の発意・作文とみてよいであろう。

このように、刻銘陶器の大半が寺社向けの寄進物として論をすすめたばあい、茶壺・水指・花入＝茶器が目立つのはどう解すべきであろうか。状況判断として、大甕・茶壺のように製作時間・経費を要するものはともかく、小物のばあい、寺社から特定工人へ単品を特注したかは疑問であり、「百六才了永」(12)、「年齢七十七才作」(14)は、やはり作者の発意と読むのが自然であろう。なお、たとえば花入が仏花瓶に転用されたことは充分想定されるが、全般に茶器の寄進は地方寺院を核とする喫茶の普及を反映する事象と考えたい。ただ、一見厨房具とみ

える壺類も、愛知県大府市藤井神社の短頸長胴壺⁽⁴⁹⁾を「藤井宮大明神 御酒瓶子」とするように
 仏神器として寄進している例があるのは注意すべきであろう。寄進の理由は、「爲法界」(8)、
 「爲六親眷族法類」(11)、「現当二世之所願」(16)、「爲雪散道清禪定門」(19)(第8図29)の
 ごとく個人の供養、一族の逆修を祈念したばあいと、たんなる「常住物」(2~4・10・18)
 があり、仏神器・茶器類が寺社の什物として窯元から恒例的に寄進されていた様子が窺える。

以上、迂遠な考定をめぐらせてきたところを総合すると、中世後期の刻銘陶器の大半は、主
 として作者ないし工人集団の代表＝窯元が施主となり、特産的高级器種を寺社常住の仏神器・
 茶器・貯蔵器として特別に製作・寄進したものであり、一部寺社からの詔物が含まれていたと
 考えられる。それは、紀年銘のみのばあいも目立つように整った書体で刻記することに象徴さ
 れており、その意味では元号を略し自己流の行書で年のみを記した39(第5図18)は、工人の
 手すさびとみるべきであろう。

最後に、刻銘陶器の性格をふまえて残された課題にふれてみたい。

まず、文字文化とのかかわりについては、中世前期の「造手」「作者」を含め刻記者を確定
 するに至らなかったが、平仮名は工人層に広く普及しており、中世後期の刻記者は原則的に器
 物を製作した工人と考えている。ただ、大甕や茶壺は名をとどめた作者＝工人個人の作なのか、
 集団の代表者名なのかは、「詔」の字句とともに検討の余地があり、16世紀の窯元制度の発達
 との関連で考察を深めねばならない。その点は留保するとしても、主として埋経修法に伴う漢
 文・仏語を刻書した宗教器の製作に、絵仏師などの遊行聖の恒常的な参画を必要とした中世前
 期に比べ、14世紀代以降、漢字が工人＝百姓までかなり普及したことが、刻銘陶器でも傍証し
 えたといえよう。時代はやや下るが、慶長12年の干支を「丙未」と記した誤りに気づき「丁未」
 に訂正した備前大甕(国立歴史民俗博物館保管、第8図27)や、備前南大窯の採集遺物中に
 「慶長元年八月吉□」⁽⁵⁰⁾と記すサヤ片が存することは、工人の漢文の習熟度を端的に物語ってく
 れる。こうした漢文の知識や作文・習字能力の向上は、私年号、擬銘あるいは異体字の使用や
 文体を注意深く読みとる作業から、さらに具体的に論ずることができるようになるであろう。

こうした文字文化の問題は、いぜん不鮮明な中世の工人像の実態へ接近する一過程であるが、
 紀年銘も編年基準資料としてだけでなく、小稿ではふれなかったが製作月の推移から稼働季節
 を特定したり、工人名から窯元の形成過程をある程度組み立てることも可能視され、刻銘で浮
 かび上がった工人組織の重層性については、「大工新二郎」(43)の記載も看過できない。さら
 に伝世資料の品質・作工の観察と刻銘を照合して陶工の主体性の評価や、詔物＝注文生産のあ
 り方に迫る一素材とすることもできよう。とくに、刻銘陶器に集中的に現れる工人(集団)と
 在地寺庵との関係は、寄進行為の原型が陶山の用益権等を介する結びつきから生じた中世前期
 の現物備進にまで遡るのかどうかの吟味や、特注品と中世の流通経済との関係など興味ある課
 題を胚んでいる。

また、産地によって刻銘資料に著しいかたよりがみられる意味も、中世諸窯の性格と無縁とは考えられない。中世前期から刻銘資料が比較的多い渥美・珠洲窯は、経塚供養具類を定数生産するうえに、刻字文刻文・刻印など加飾法が発達した点でも共通している。備前窯は絶対数では突出するが中世後期、それも16・17世紀代に集中するのは、大甕と茶器に代表される特産品の高級品の生産地として急成長を遂げたことと関係するのであろうが、同じ広域商圈を確保しながら基本三種の規格的量産示向から脱却しきれず、加飾性に乏しい東播系諸窯や常滑・越前窯と対照的である。この他、容量の研究に資するものとして、備前大甕のほかに、「しろかね入 十メめ入」(32)、「二斤入」(48)も検討の要がある。

以上、気付くままに問題を羅列したが、総括的にいって、刻銘陶器は中世の地域文化ないし民衆文化の実態把握の一助として活用を図ってゆくべきであり、考古学と文献学の協業による歴史像創出の一接点となりうることを検証しえたことで、小稿成文の意図は一応果たせたことになる。

註

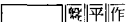
- (1) 田中照久「玄達瀬から発見された越前焼」『福井考古学会会誌』5 (1987年)、赤羽一郎「常滑窯をめぐる若干の考察」『知多半島の歴史と現在』2 (1990年)。
- (2) 伊藤晃・上西節雄「作品解説」『備前』日本陶磁全集 10 (1977年)、67頁。
- (3) 吉岡康暢「珠洲系陶器の暦年代基準資料」『北陸の考古学』1 (1984年)。(2)は新出資料。
- (4) 野末浩之「館蔵珠洲経筒外容器について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』8 (1989年)。
- (5) 景浦勉「越智氏」『国史大辞典』2 (1980年)。
- (6) 西井竜儀「福岡町上向田経塚について」『オジャラ』2 (1967年)。
- (7) 江崎武「納骨五輪小塔の研究」『東洋陶磁』8 (1982年)。
- (8) 東四柳史明・和嶋俊二「第4章 中世」『内浦町史』3 (1984年)。
- (9) 和嶋俊二「珠洲地方の中世社会からみた珠洲焼」『珠洲法住寺第三号窯』石川県教育委員会・珠洲古窯跡発掘調査委員会 (1977年)。
- (10) 水野正好「鎮井祭の周辺」『奈良大学紀要』10 (1982年)。
- (11) 四柳嘉章「中世村落における信仰の諸形態」『西川島一能登における中世村落の発掘調査一』穴水町教育委員会 (1987年)、652頁。
- (12) 定塚武敏編『珠洲古陶一越中における展開一』(1980年)、図版42。
- (13) 銅経筒の例であるが、「寛治七年十一月廿甲午日 雀部重吉」(関秀夫編『経塚遺文』1985年、32号)は、「康和三年^{辛巳歳}十月始(中略)鋳師雀部重吉」(同上、39号)ともみえ、単独で記す人物が願主とは限らない。
- (14) 小野田勝一他『惣作古窯址群』田原町教育委員会 (1976年)。
- (15) 箱根美術館保管。
- (16) 古本銃吉氏採集・保管。
- (17) 小野田勝一他『渥美半島における古代・中世の窯業遺跡』田原町教育委員会 (1971年)。
- (18) 網野善彦『日本論の視座』(1990年)、330頁。
- (19) 「宜圓ス(ツ)リノ(ノ)ハチ」の刻銘を有する13世紀前半代の備前片口鉢がある(第5・8図16、間壁忠彦・葎子「備前焼研究ノート(4)」『倉敷考古館研究集報』18、1984年)。
- (20) 瀬田勝哉「神判と検断」『日本の社会史』5 (1987年)。
- (21) 吉岡康暢「珠洲系陶器における加飾法の展開と特質」『東洋陶磁』8 (1982年)。花押については、佐藤進一『花押を読む』(1988年)他参照。
- (22) 三ツ鱗文の意匠は、鎌倉市雪ノ下1丁目地点の方形堅穴出土の漆器碗皿(馬淵和雄他『鎌倉市埋蔵

- 文化財緊急調査報告書』6, 1985年), 木製蓋(斉木秀雄「三鱗文、の刻まれた木製品」『鎌倉考古』2, 1980年), 砥石(斉木秀雄「刻文のある砥石片」『鎌倉考古』16, 1982年), 東勝寺・極楽寺・鶴岡八幡宮平瓦(『東勝寺遺跡発掘調査報告書』1977年他)等鎌倉市内のほか、湖西市吉美中村遺跡D区溝出土の石硯(13世紀中葉ごろ)裏面に縦に2図形を窺書きした例がある(後藤健一『山口第17地点古窯跡発掘調査報告書』湖西市教育委員会, 1991年)。また、陶器の刻文としては、信楽壺(岡田宗叡編『信楽古窯集成』1982年, 35図, 15世紀, 器高24.5cm)が知られている。
- (23) 水野九右衛門『時代別古越前名品図録』(1975年)。
- (24) 近江風土記の丘資料館『中世の信楽—その実像と編年を探る—』(1989年), および松沢修平恵送資料。
- (25) 註21文献。
- (26) 城ヶ谷和広「小田妻古窯群の調査」『埋蔵文化財愛知』19 (1989年)。
- (27) 岡田博他「亀山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』3, 岡山県教育委員会 (1988年)。
- (28) かまくら陶芸館(長谷川幹晃)保管。
- (29) 吉岡康暢「北東日本海域における中世窯業の成立」『国立歴史民俗博物館研究報告』16 (1988年), 52~53頁。
- (30) 未見。三輪善之助「伊勢の陶製経筒」『考古学雑誌』21—8 (1931年)。
- (31) 奥村秀雄「経塚研究の一視点—藤井氏に関して—」『大和文化研究』8—8 (1963年), 28頁。
- (32) 中村五郎「岩代承安銘に見える藤井氏について」『大和文化研究』10—5 (1965年), 30頁。
- (33) 註29文献, 59頁。
- (34) 赤羽一郎「久安2年(1146年)銘陶製五輪塔」『愛知県陶磁資料館研究紀要』4 (1985年)。
- (35) 津田守一「三重県広永陶苑所蔵の陶製光背片」『考古学ジャーナル』191 (1981年)。
- (36) 註29文献, 57頁。
- (37) 中村五郎「豊受大神宮禰宜度会氏の経塚造営とその周辺」『福島考古』30 (1989年)。
- (38) 註9文献。
- (39) 註29文献。
- (40) 三浦圭一「技術と信仰」『技術の社会史』1 (1982年)。なお、経筒を製作した鋳物師にも、「鋳師僧永源」(『経塚遺文』35号)、「鋳造僧永尊」(同前41号)等がみえる。
- (41) 「付表」は、植崎彰一・藤沢良祐編「年表」『世界陶磁全集』3 (1977年)のほか、備前窯については、桂又三郎「年銘もの」『時代別古備前名品図録』(1973年), 岡山県立博物館『備前焼—その流通と特色—』(1979年)を参考とし、信楽窯については松沢修平, 瀬戸美濃窯については藤沢良祐のご教示をえ、筆者実見分を加えて作製した。なお、成稿後、上西節雄のご教示によって備前窯には一覽年月表のほかに、応永23年4月吉日(壺), 応永29年4月25日(四耳壺), 天正9年5月箇中(土管), 天正1028日(大甕), 天正13年6月28日(大甕), 天正18年4月吉日(四耳壺)の6件の資料の存在を知った。表全体についても不備が予想されるので補正を期したい。
- (42) 註19文献, 62頁。
- (43) 間壁忠彦・葎子「備前焼研究ノート(3)」『倉敷考古館研究集報』5 (1968年), 吉岡康暢「15・16世紀の窯業生産」『東日本における中世窯業の基礎的研究』昭和63年度科学研究費成果報告書 (1988年)。
- (44) 磯部幸男・奥川弘成『中田池古窯址群』1, 武豊町教育委員会 (1990年)。「正見」=「寛」とみて「寛元年の判読も考慮されるが次行の「正月」の運筆から「正見」とみる。
- (45) 西村真琴・吉川一郎編『日本凶荒史考』(1983年)。
- (46) 千々和至『板碑とその時代』(1988年), 238頁以下。
- (47) 註46文献, 242~243頁。
- (48) 相田二郎『日本の古文書』上・下 (1949年) 他。
- (49) 愛知県教育委員会『愛知県指定文化財図録』5 (1978年)。
- (50) 桂又三郎『伊部南大窯址発掘資料』日本陶磁協会 (1952年)。
- (補註) 小文の作成にあたり、東京国立博物館, 名古屋市立博物館, 五島美術館, 網野善彦, 小島道裕, 長谷川幹晃, 江崎武, 古本銃吉, 磯村朝次郎, 上西節雄, 藤沢良祐, 松沢修平, 岩中淳之の諸機関, 各位より刻銘の読解および資料・写真等のご提供とご教示をうけた。深甚なる謝意を表する。

(国立歴史民俗博物館 考古研究部)

付 表 中世刻銘陶器一覧

	紀 年	器 種	刻銘形式	使用者(納入先)	寄進者・作者	趣 意 他
1	暦応 5 (1342)	大 甕	B		備前国 ^国 人 香 登御庄 ^庄	あつらう (和歌 山県長寿禅寺裏 山出土)
2	貞治 2 (1363)・正・吉日	三 耳 壺	B	善応寺		常 住
3	福安元・3・23 (1444)	四 耳 壺	A	石井原山橋本坊	作者伊部村之鈞 井衛門太郎(花 押)	常住物
4	長祿 4・閏 9・日 (1460)	三 耳 壺	B	熊野山		常住物
5	文明 6・7・10 (1474)	〃	D			
6	文明12・卯月・24 (1480)	四 耳 壺	B	備前国伊部村小 幡山長法寺谷之 坊教舜		
7	永正 4・6・3 (1507)	水 指	B		道仙作	
8	永正 5・7・3 (1508)	〃	D			為法界
9	永正 9・6・日 (1512)	花 瓶	A	横尾山	伊部木村三郎右 衛門	奉寄進
10	永正14・無神月・日 (1517)	広 口 甕	A	播州福留庄禪林 坊	香々登庄伊部村 之住人源次作也	常住物
11	大永元・8・吉日 (1521)	花 入	A	小滝山真光寺西 福院	施主伊部玄雲	奉寄進 為六親 眷族法類
12	享祿元・3 (1528)	〃	B		百六歳了永(花 押)	
13	天文元・6・吉日 (1532)	水 指	A	小幡山	願主新藏主 木 村孫兵衛尉	
14	天文元・9・日 (〃)	花 入	B		年齢七十七歳作	
15	天文 2・卯月・吉日 (1533)	四 耳 壺	B		主彦左右門	
16	天文20・6・28 (1551)	花 瓶	A	千年山弘法寺	香々登庄伊部村 内木村三郎衛門 尉宗吉	現当二世之所願 悉皆満足
17	天文23・7・吉日 (1554)	壺	B		伊部木村三郎左 衛門	
18	弘治 3・3・21 (1557)	花 入	B	備州大滝山中道 院		常住物
19	永祿12・卯月・21 (1569)	花 瓶	A	横尾山本堂	施主香登庄伊部 木村与次郎	奉寄進 為雪散 道清禅定門
20	元亀 2・卯月・吉日 (1571)	大 甕	C			ひねりつち 参 石入
21	元亀 4 (1573)	大 甕	C			あつらへ 叶 貳石入 ひねり つち
22	天正元・2・吉日 (1573)	水 指	B		谷口喜道	
23	天正 2・2・日 (1574)	〃	D			
24	天正 2・8・日 (〃)	〃	D			

	紀年	器種	刻銘形式	使用者(納入先)	寄進者・作者	趣意他
25	天正3・8・2 (1575)	水指	B	備前国伊部村宗 恵喜□兵へ作 小幡山長法寺	谷口□道作	三石入 しろかね入 十 メめ入 奉寄進 現当二 世為安楽
26	天正6・3・吉日 (1578)	〃	B			
27	天正6・6・吉日 (〃)	大甕	C		上原□	
28	天正7・卯4 (1579)	壺	B		備前住吉助	
29	天正10 (1582)	大甕	C			
30	天正10・師走・28 (〃)	〃	C			
31	天正11・7・1 (1583)	〃	B		太郎左衛門作	
32	天正12・6・15 (1584)	壺	B		いんへ保二郎	
33	天正18・4・24 (1590)	〃	B		孫兵衛(花押)	
34	天正18・4・24 (〃)	四耳壺	B		弥四郎右衛門尉 (花押)	
35	天正20・5・16 (1592)	花瓶	A		願主南村宗清 木村孫兵衛	
36	文禄3・3・吉 (1594)	大甕	B		宗右衛門	
37	文禄3 (〃)	〃	D			
信楽						
38	応永3・9 (1396)	香炉	B		信楽権右衛門作	
39	応永28 (1421)	壺	D			
40	永禄元・9・吉日 (1558)	四耳壺	B		信楽 勅使 染 師満介作	
41	天正元 (1573)	水指	B		□  作	
42	天正11・3・日 (1583)	大壺	D			
43	天正17・3・5 (1589)	〃	B		大工新二郎	
44	天正18・4・24 (1590)	片口鉢	B		□八兵衛(花押)	
丹波						
45	観応元・卯月・日 (1350)	壺	D			
46	康永3・6・上旬 (1344)	大壺	D			
47	康永3・9・日 (〃)	〃	D			
48	天正2 (1574)	壺	B		助右衛門	二斤入
越前						
49	(嘉元) かけん4・8・17 (1306)	中甕	B		にうのきたのこ おり(北郡)お たのしやう(織 田庄)あかたの とらかたいう (県虎大夫)	(京都府由良川 河口出土)

	紀 年	器 種	刻銘 形式	使用者(納入先)	寄進者・作者	趣 意 他
50	元亨3・9・29 (1323)	大 甕	D			
51	永享11・7・日 (1439)	壺	D			油カメ, □上惣 □
		常 滑				
52	正見元・正・27 (1359)	陶 硯	B		沙弥尾張相□	
		瀬戸・美濃				
53	正和元・12・日 (1312)	灰 釉 瓶 子	A	長滝寺白山神社	尾州愛智郡住清 原広重, 嶋郡奥 田安楽寺住阿闍 梨栄秀	奉施入, 仏酒器
54	元亨4・8 (1324)	灰釉狛犬台 座片	D			(瀬戸市萱刈窯 出土)
55	正中2・2□ (1325)	〃	D			(〃)
56	応永25・12・朔 (1418)	灰 釉 狛 犬	B		熊野 浄通	
57	永正9・卯・下旬 (1512)	鉄釉四耳壺	B		賀藤□景	
58	永正13・3・下旬 (1516)	〃	B		助九良	
59	永正18・5・12 (1521)	鉄 釉 水 指	B		てんもくや又四 郎	
60	享禄4・卯・10 (1531)	鉄釉四耳壺	D			
61	天文10・3・吉日 (1541)	〃	D			祖母懷
62	永禄元 (1558)	鉄 釉 花 入	D			(岐阜県大萱出 土)
63	天正8・3・25 (1580)	鉄釉四耳壺	D			
64	天正10・3・吉日 (1582)	〃	B		賀藤五右衛門作	祖母懷
65	文禄2・8 (1593)	黄瀬戸向付	D			(岐阜県大萱窯 下窯出土)

* 各項目は刻銘の原文をとどめるよう留意した

** 干支は省略した

Medieval Earthenware with Engraved Inscriptions

YOSHIOKA Yasunobu

Some medieval earthenware bears engraved inscriptions consisting of a small number of Chinese or Japanese characters or sentences. These are roughly classified as follows :1) Religious receptacles such as cylindrical sutra cases of mainly the latter half of the 12th century, inscribed with the name of donator, sutra text, and the purpose of the offering. 2) Buddhist or *Shinto* ritualistic implements specially ordered or contributed as temple utensils after 14th century; various utensils for the tea ceremony which was in fashion in the Azuchi and Momoyama Period, and jars and pots as utensils for daily use. The former group has attracted attention as providing material for the investigation of the social-and cultural-historic background to the construction of the Kyo-zuka (sutra mounds), by constructing the manner in which sutra burying procedures were carried out. The latter has been used not only as a chronical standard, but also as material to discuss the operating seasons of ceramic production in relation to agricultural workers.

However, the characteristic of the inscribed earthenware, or the meaning of the inscriptions, has not been thoroughly investigated, due to the difficulty in defining by whom and at which stage of the production process the inscription was made.

This paper aims to discuss 15 items of Suzu earthenware traded in the North-eastern Japan Sea area, and to discuss them from the viewpoint of the lifestyles of workers, by using related documents on various Medieval ceramic kilns such as Atsumi, Bizen, Echizen, Shigaraki, etc. as supportive materials.

At first, the production of religious utensils with inscriptions in the early Medieval age presupposes expert knowledge of Buddhist documents and ceremonies, judging from their shapes and designs. It can be supposed that painters of Buddhist images who travelled about the provinces with priests for Kanjin (soliciting contributions for pious purposes), or priests of local temples prepared the draft or themselves wrote the inscription. It is supposed that there existed skilled expert groups who led the ordinary workers (farmers) engaged in the production of everyday utensils.

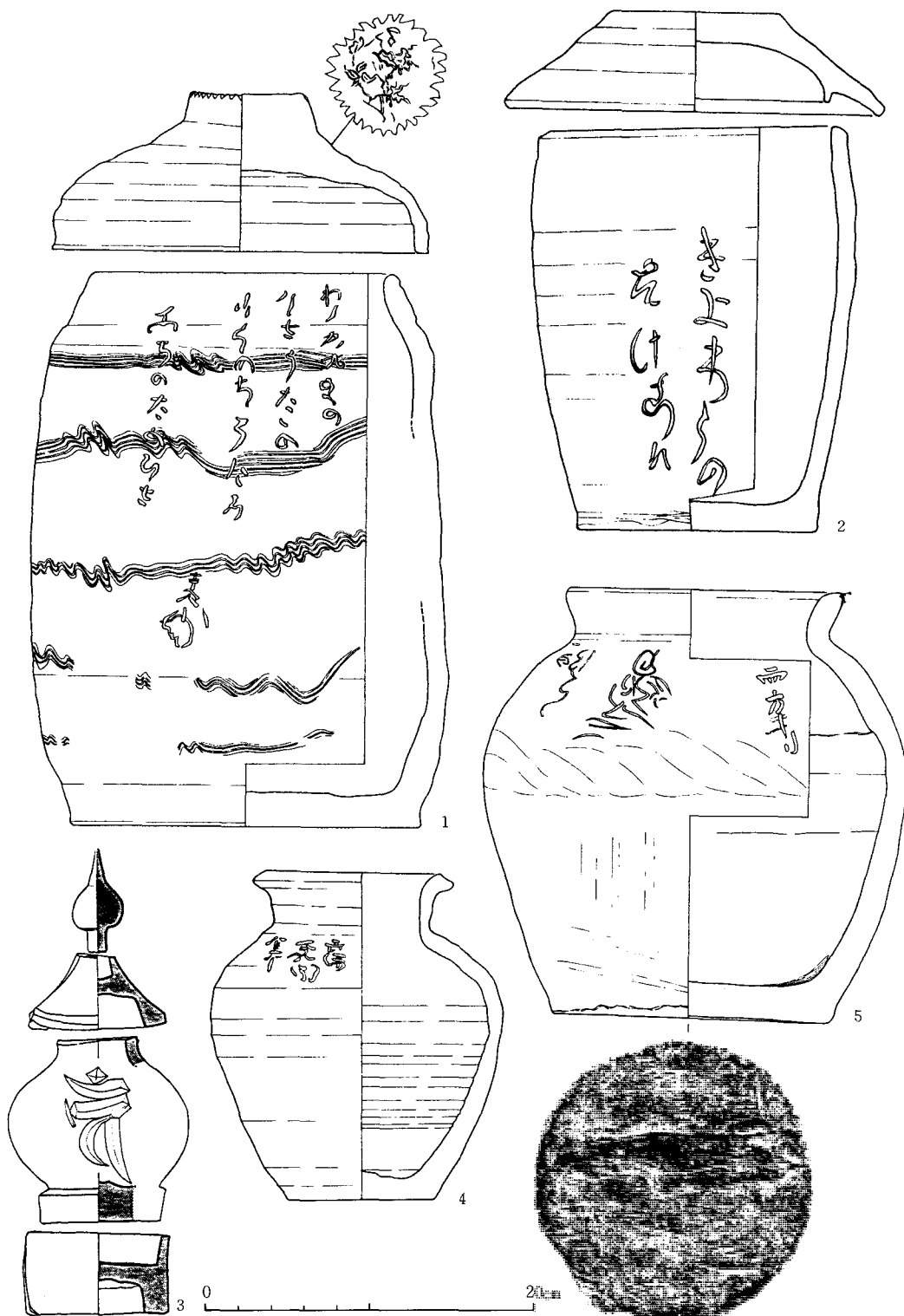
On the other hand, examples of simple inscriptions in Hiragana (a Japanese

syllabary) without a formal year number on cylindrical sutra cases or five-storied pagodas (Gorintha) are seen in local and private religious procedures, the purpose being to perform a good deed. The diffusion of Hiragana among the workers can be guessed from improvisatory *comic songs* and calligraphies. Utilization of Katakana (another Japanese syllabary) was rare, and limited only to inscriptions which suggest the names of items, or magical words. Katakana was distinguished from other writing, as "characters to express words uttered orally."

Then, in the later Medieval age, especially after the 16th century, when the amount of material increases dramatically, inscriptions came to be seen on utensils for tea ceremony, such as tea jar, water jar, tea caddy, etc., together with large pots and jars, in addition to the conventional Buddhist or *Shinto* ritualistic utensils including flower vases, bottles, and images of Korean dog (a pair of guardian dogs at the gate of a *Shinto* shrine). Few of the inscriptions took the form of a well-arranged donation letter or supplication letter. Either the recipient's name or the donator's name was omitted, or only the description of the year occupied a large part of the inscription. The majority of inscribed earthenware was especially produced and donated to a temple or a *Shinto* shrine as "permanent utensils" by a worker or a representative of a group of workers (Kamamoto) as supplication for memorial service in honor of his ancestors or present family, or for improvement of pottery techniques. Some of them were "tailor-made" (especially ordered), as in the example of a large pot from the Bizen district. At this stage, it is judged that the workers themselves engraved the characters, either in Chinese or Japanese, and a considerable number of names of workers can be confirmed. This may reflect the transition toward a new production system after the 15th century, in which standardized everyday utensils for large-area distribution were manufactured at the same time as high-quality special goods.

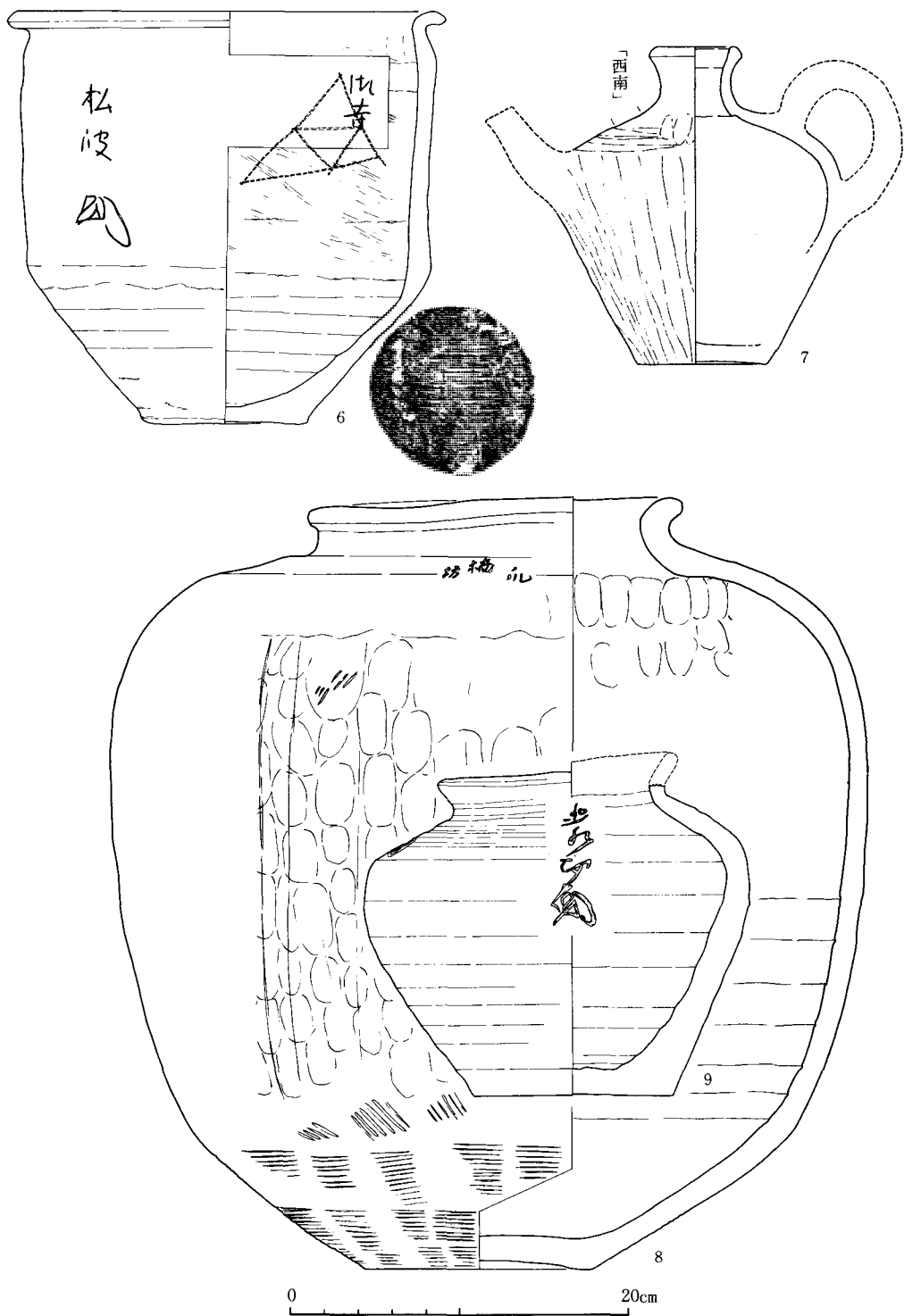
In addition to the above, some earthenware bears inscriptions of "(east,) west, south, (north)", which were apparently magical characters relating to the ceremony for the purification of a building site, or privately-defined Nengo (name of era). Of the latter, there are examples which seem to have been ordered by local priests, or merchants who prayed for success in their commerce. Another example bears the name of a local temple combined with the written seal (Kaō) or crest of a local lord, apparently to demonstrate his prominence as a man of importance. Pseudo-inscriptions,

which were designed from characters, appeared at this stage. In this way, though the amount of material is limited, earthenware with inscriptions may be of help in understanding the true nature of the popular culture which was rooted in different regions in the Medieval Age, through the medium of the character culture. It is also expected that the earthenware with inscriptions will contribute to the construction of a historical image of popular culture, through cooperation with archaeology and philology.



第1図 珠洲系陶器の刻銘(1)

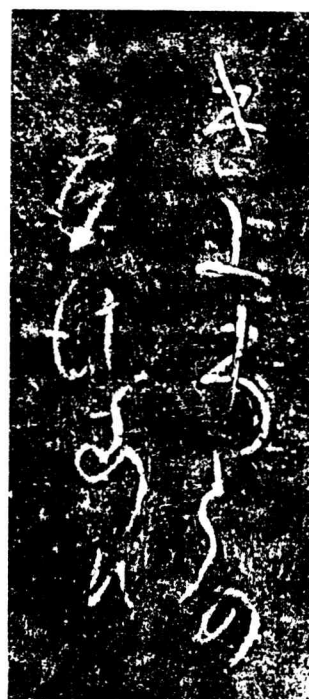
(1 加賀真樹原図に加筆, 2 註6, 3 註7)



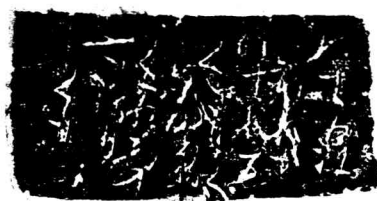
第2図 珠洲系陶器の刻銘(2)



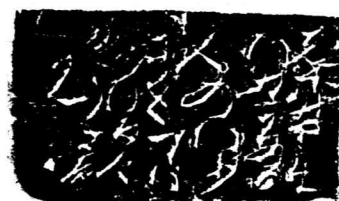
1



2



3-2



3-3



3-1



3-4

0 5cm

第3図 珠洲系陶器の刻銘(3)



4



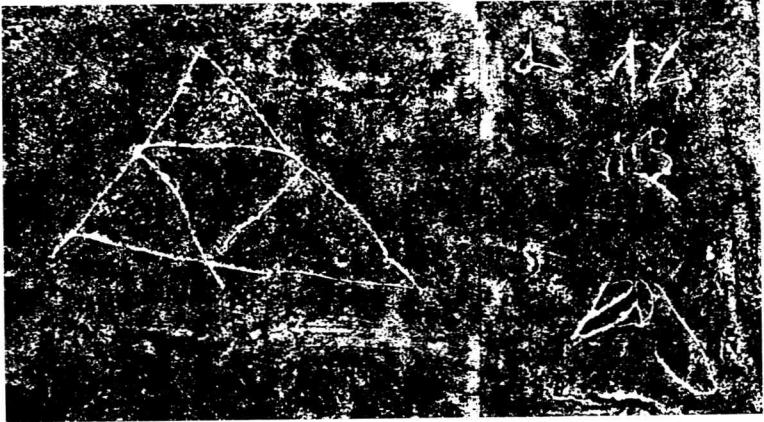
8



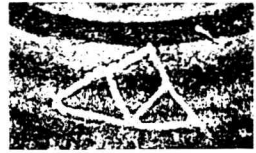
7



6-1



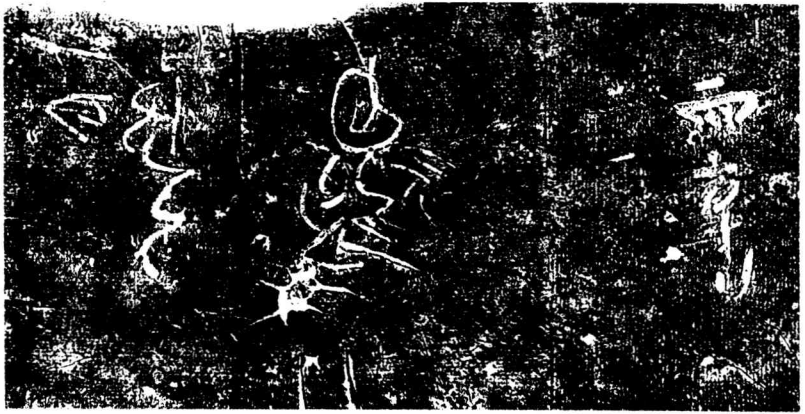
6-2



9-1



9-2



5



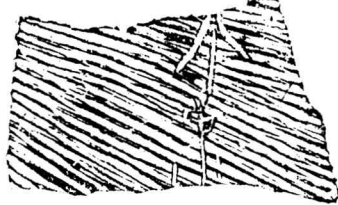
11



13



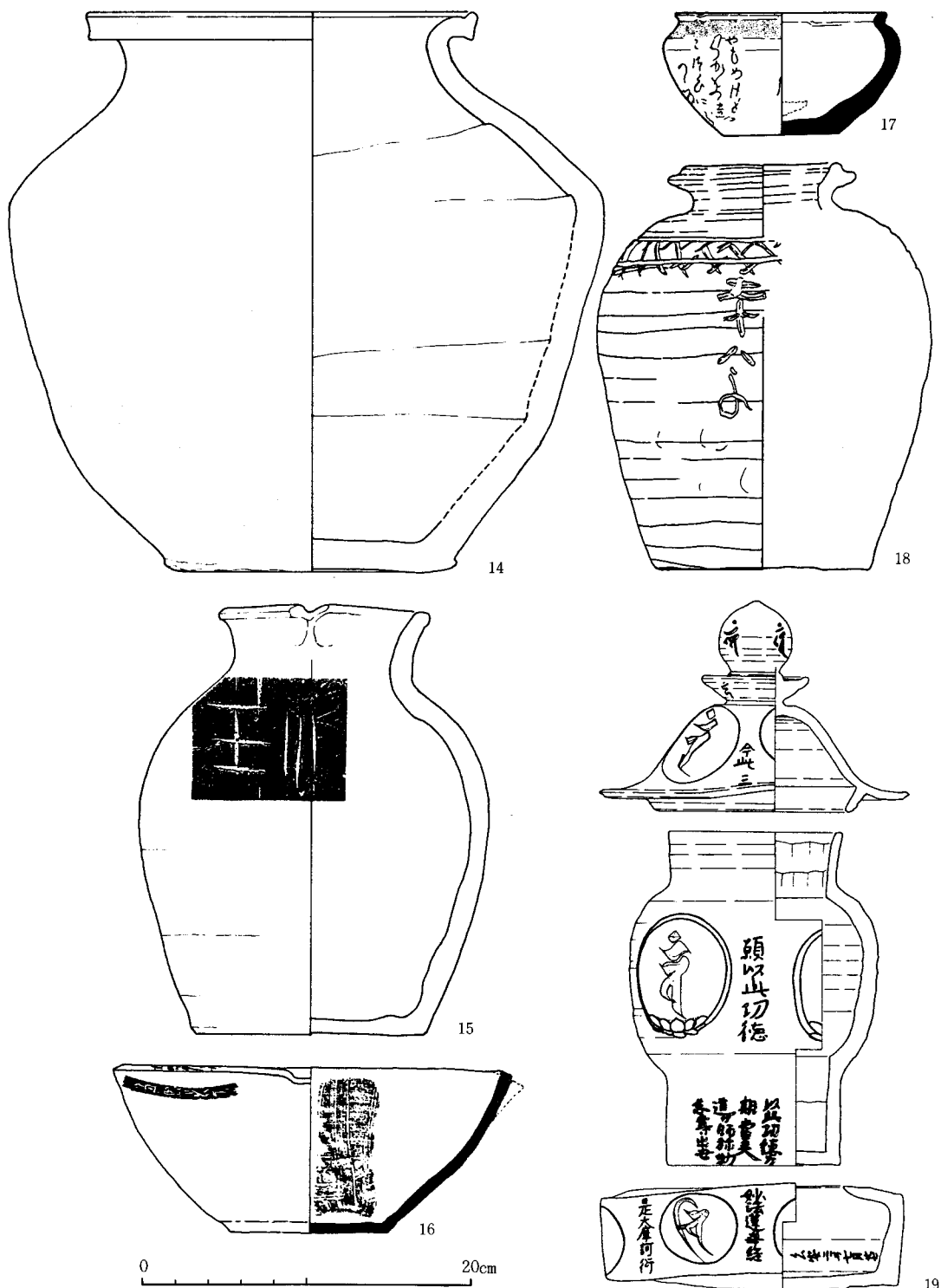
10



12

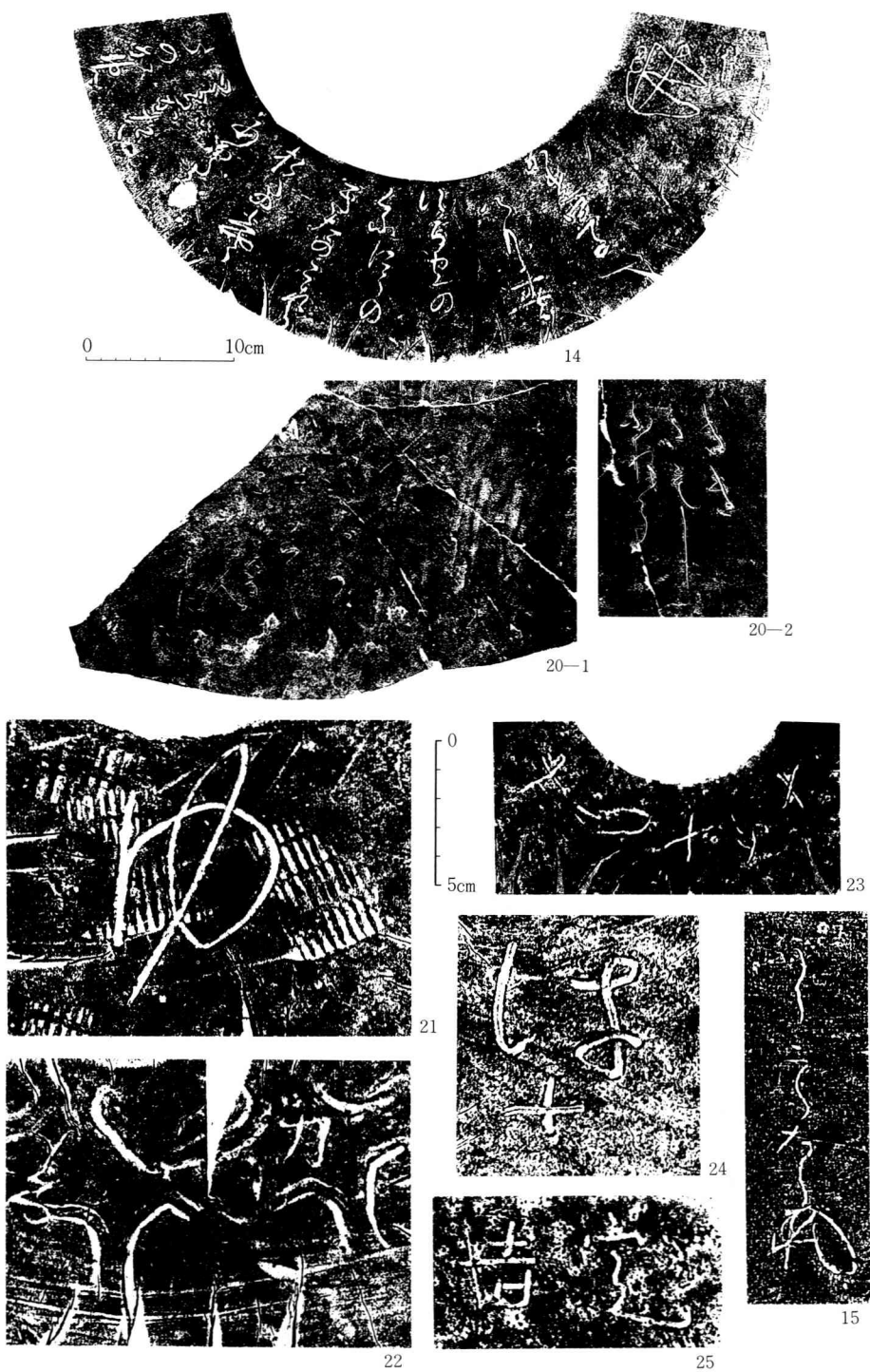


第4図 珠洲系陶器の刻銘(4)



第5図 中世各窯の刻銘

(15 小野正敏原図, 16 註19, 17 註14, 18 註24, 19 註34)

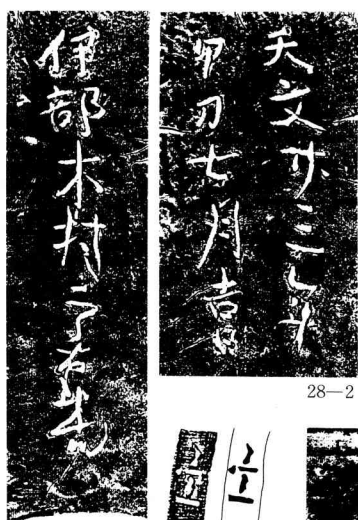


第6図 中世各窯の刻銘と刻字文

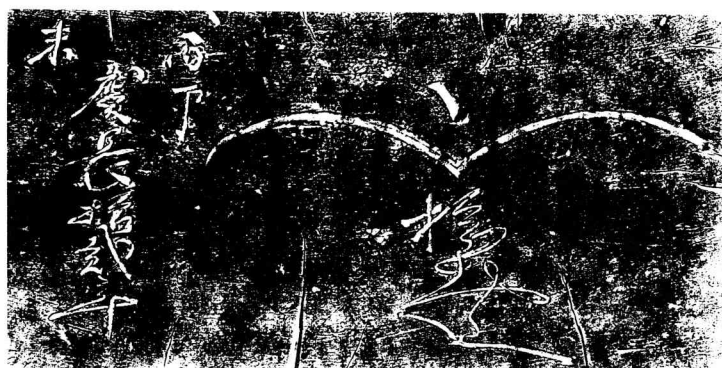
(21・22 渥美・甕, 壺 23 常滑・水注 24・25 越前・甕, 壺)



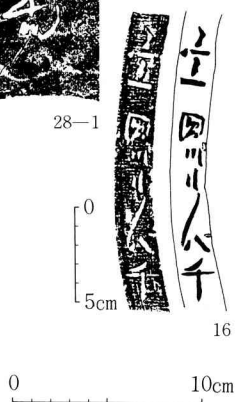
26



28-2



27



28-1

16



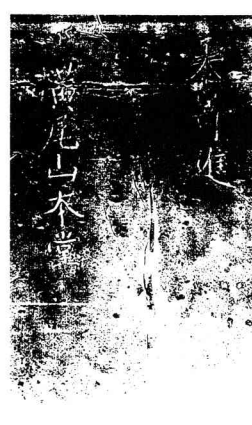
29-4



29-3



29-2

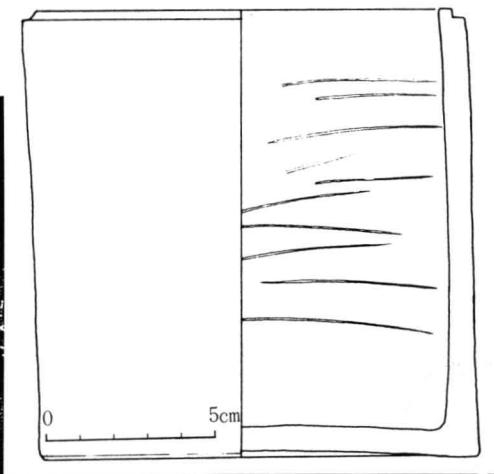


29-1

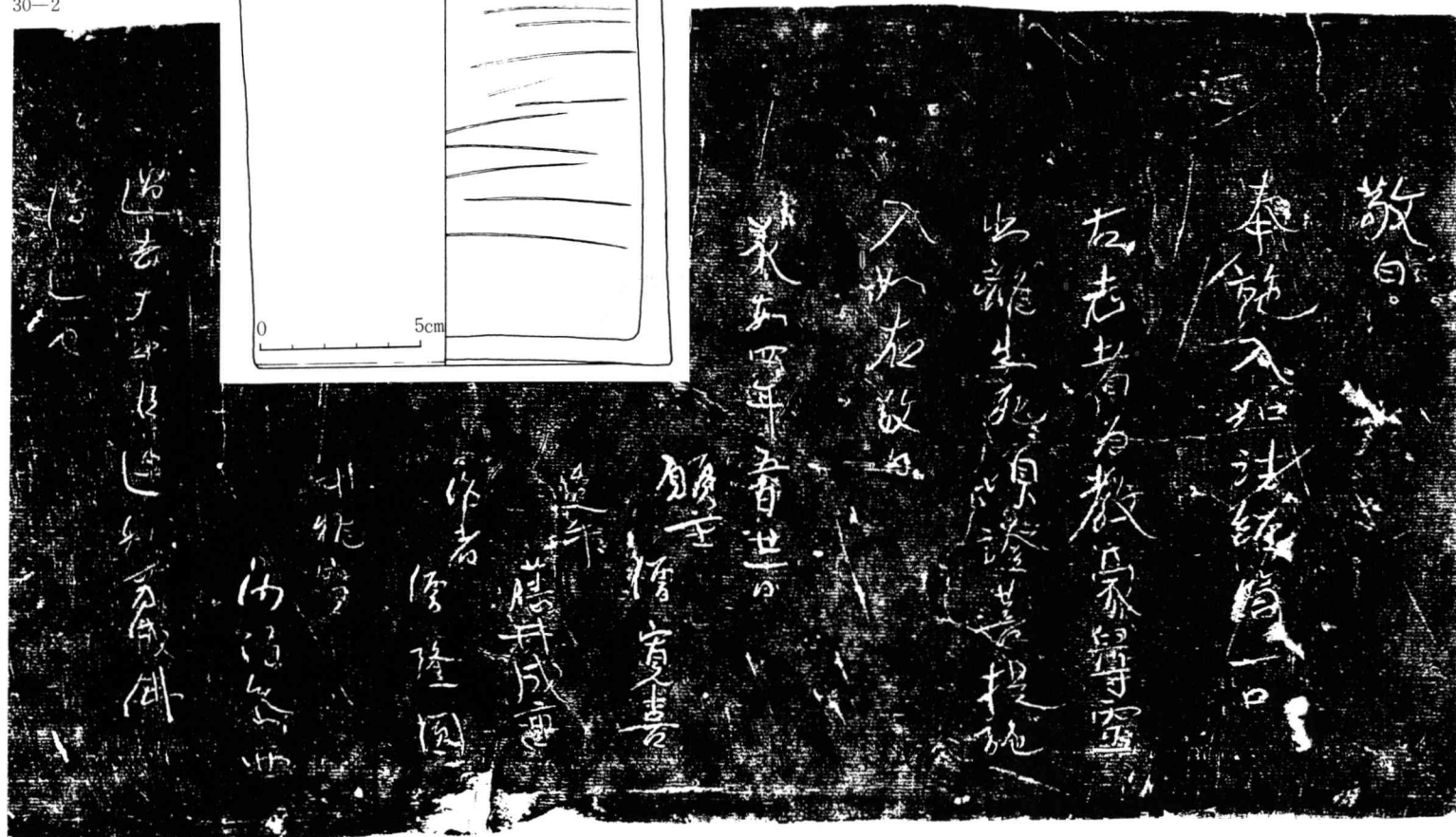
第7図 備前陶器の刻銘

30-1

30-2

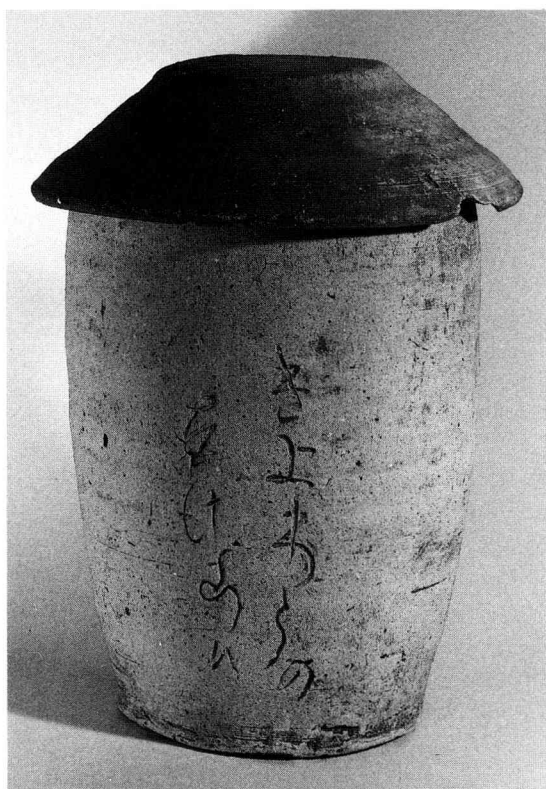


0 10cm



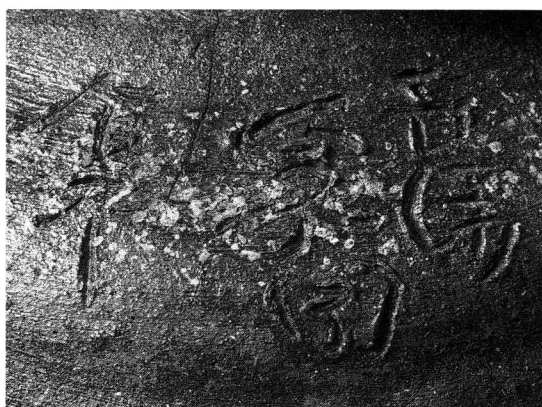
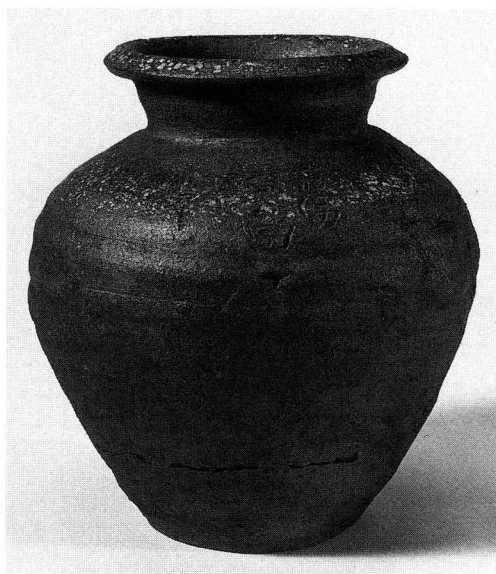
第8回 瓦製經外容器

図版 I

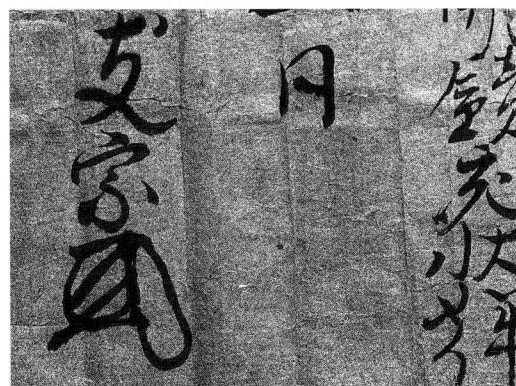
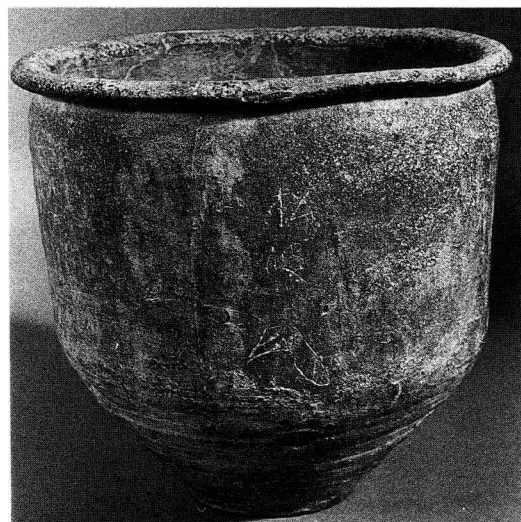
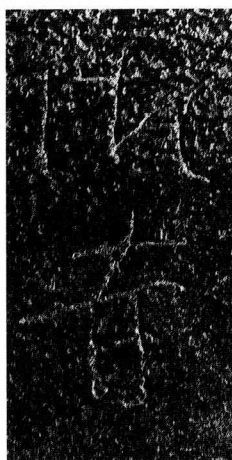


上 珠洲・経外容器 下 珠洲・経筒（富山県上向田経塚）

図版II



上 珠洲・壺 下 珠洲・大壺 (石川県中谷家伝世)



左上・中 珠洲・壺 右中・左下 珠洲・小甕（石川県寺山墳墓） 右上 貞和5年4月11日
付若山庄名主職宛行状（常利弁志家文書） 右中・下 文和5年2月5日付友宗山林去渡状（同上）

図版Ⅳ

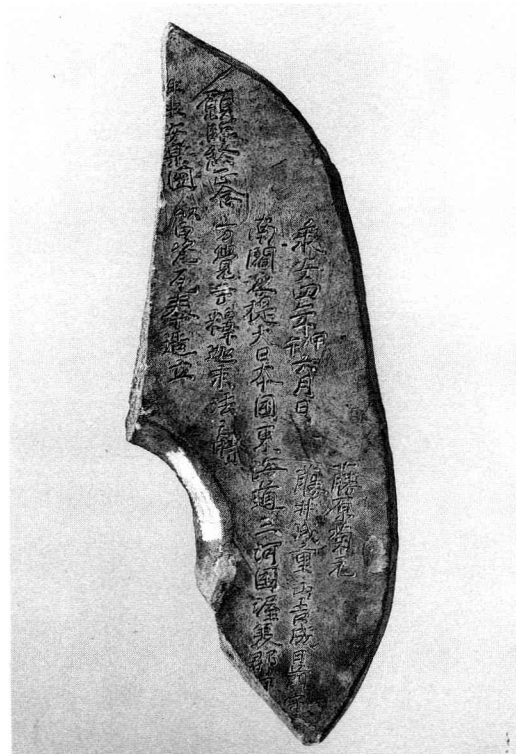


上・右上 珠洲・五輪塔 左下 珠洲・壺（かまくら陶芸館） 右下 珠洲・壺（秋田県脇本浦田）



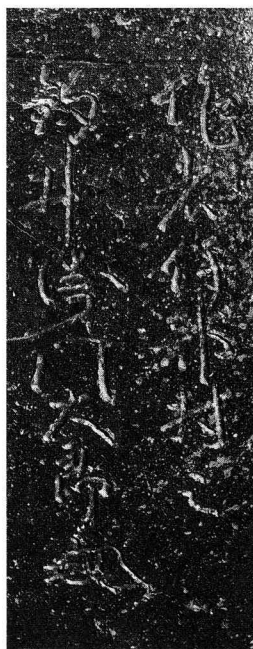
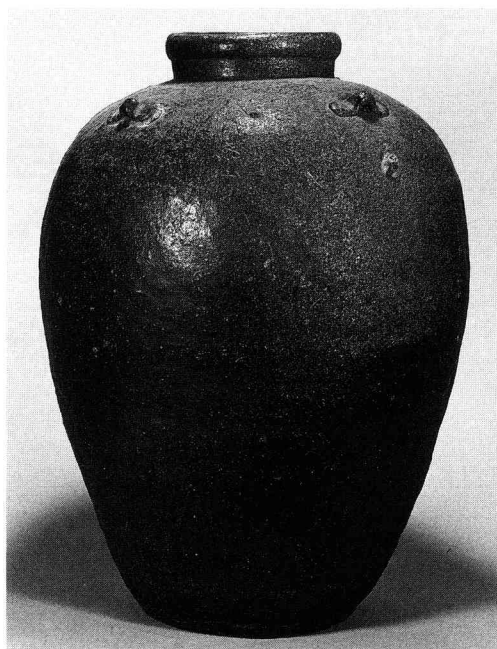
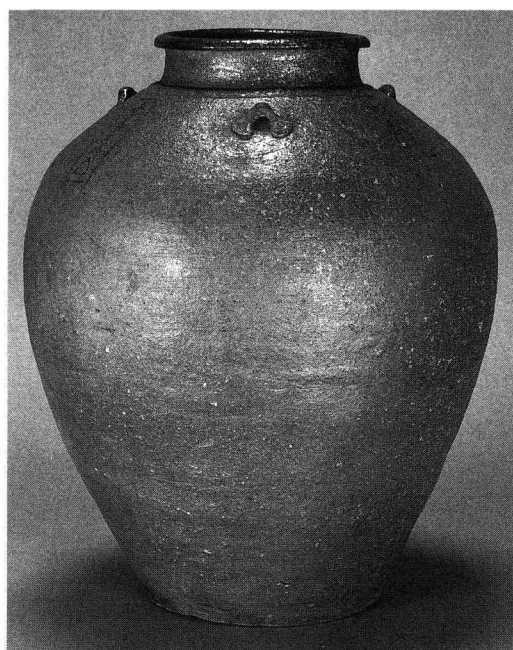
上 珠洲・壺（図版Ⅳ右下、秋田県脇本浦田）刻銘 下 越前・大甕刻銘

図版 VI



上 渥美・光背 A (三重県小町塚経塚) 下 渥美・光背 C (同上)

図版Ⅶ



上 丹波・三耳壺 下 備前・四耳壺（岡山県千光寺伝世）



左上・右 常滑・陶硯（愛知県中田池A1号窯，武豊町教育委員会）
 左下・下 瓦製経容器（かまくら陶芸館）